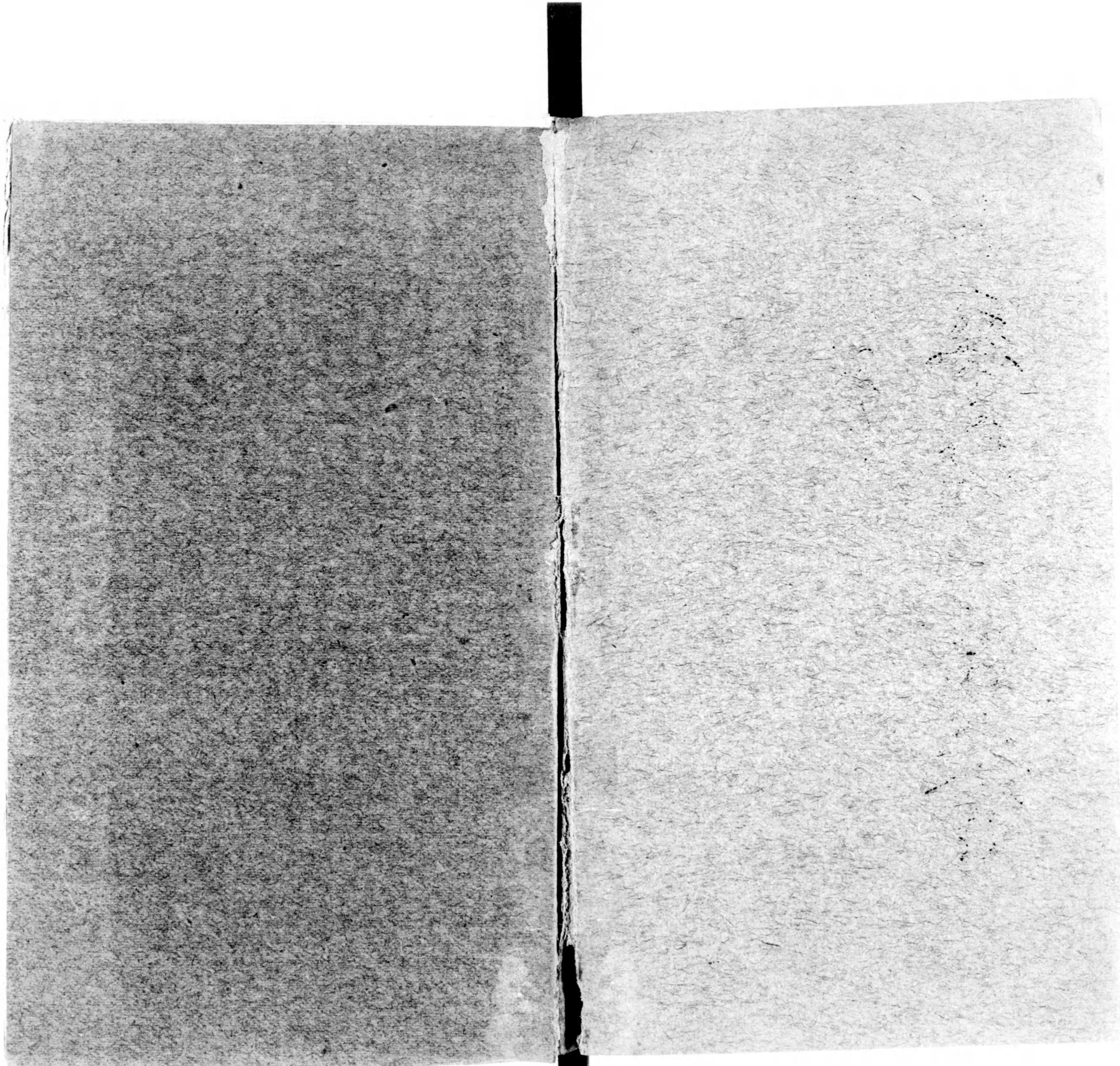


始







荒 宮 本 武 藏



藏武本宮

守驛飛生柳

門衛右又木荒

特 100
137

日本武術の譽目次

荒木 又右衛門

吉岡 又三郎

宮本 武藏

井伊 直人

柳生 飛驒守

.....

.....

.....

.....

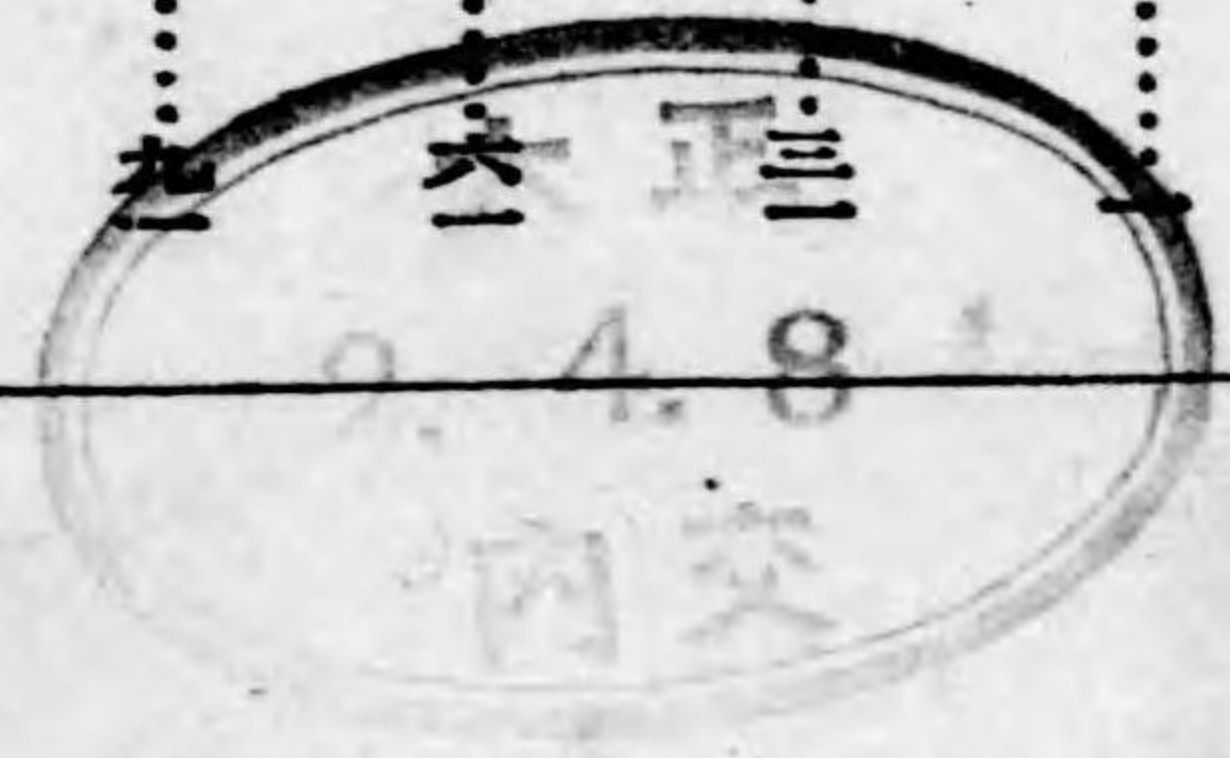
.....

三

三

六

三



日本武術の譽

荒木 又右衛門

浪花節俱樂部口演

フシ、日の本や花は櫻木武士道の名譽を上し人々
 をあつめてこゝに競べ駒綴る錦の糸手綱巻の
 數さへ千傑の其第一は名にし負ふ伊賀の上野の
 仇櫻香りを史上に止めつゝ後の世までも匂はせ
 し荒木嚴村の一席を」

エ、今回お勸めに随ひまして、寛永年間に武名を轟かせたる武藝者

目次 終

笹野權三郎	………一五二
寶藏院覺禪坊	………一七九
岩見重太郎	………二〇九
澁川伴五郎	………二四二

數十名を撰みまして其の中で最も面白い處を講じまする、先第一として伊賀國安部郡荒木田村の住人荒木又右衛門嚴村先生の傳記を申上げます、扱て柳生重兵衛三嚴先生の門人荒木又右衛門が一萬三千六百人の門弟の内より僅か一人選み出されまして、師匠より柳生流の極意を授けられました所から、是より諸國を修行に出で、永らく大坂に居りましたが、備前國岡山池田家の渡邊鞆負殿と同道して江戸表へ参りまして、右の鞆負が荒木嚴村の器量に底根惚れ込んで、段々道場を建るに然るべき地所を捜して居りましたが、幸ひ牛込の神樂坂に宜い地面が空いてございました、依つて之れを借り受けまして金に飽かせて立派なる道場を建て、之れに荒木を住はせると云

ふ事に相成りました、そこで荒木は先づ此所に柳生流の指南を始めましたが、先づ一番に渡邊數馬、其他池田家の家中の面々が、我もくと争つて入門に及びまする、尤も又右衛門は此の道場の表へ對して最も立派な看板を掲げました、其の看板に、
フシ「柳生眞流指南 武藝十八般他流試合 勝手たるべき者なり 荒木又右衛門源嚴村 道場出張所」
と記しました、すると此前を通行するものは何れも立止つて之れを眺め大きに驚きました ○「オ、チヨイと此の看板を見ねへ、立派な看板ぢやアねえか、柳生眞流……ハ、ア柳生眞の流と書いてあるせ △ム、ウ、大体此の柳生流と云ふのは木挽町の五丁目に道場を

構へて當時盛んに遣つて在らつしやる將軍様の御指南番柳生飛驒守様のお家に傳はる一流だ、夫れを今當家に、乃公の方が眞個だと言はぬばかりに柳生眞の流と云ふ看板を掲げた、妙な事もあるもんだ此方が本家かな。×「まア左様なものだらうよ、當主の柳生様といふのは、以前至つて放埒なお仁で、一度親御に勘當されて方々を徘徊して居らつしつたそうだ、其の時分に大方此の荒木と云ふ先生に就いて劍術をお習ひなすつたのだらう、夫れで柳生流は乃公の方が本家だといふので此様な看板を出したのだらう。○「まア、そんな事つた」

「此の看板を見る毎に 荒木を賞めての尊取り取

り 何時とはなしに江戸市中 大評判とはなつたり

けり」

斯様な譯で柳生飛驒守殿の御耳へ入らぬでもございませぬが、知つて知らぬ態をして在らつしやいます、然るに此事が遂に時の老中松平左近將監殿のお耳に這入り、將軍家の御膝元に於て左様な傍若無人なる看板を掲げると云ふのは、第一公儀を憚らざる致し方、次ぎには柳生家を輕蔑に致したる所爲、決して此儘棄て置く譯には相成らぬと大いに御立腹遊ばして或日殿中に於て柳生飛驒守を老中部屋へお招ぎに相成り 左「何んと飛驒殿、風説に承はれば、當地牛込神樂坂に荒木又右衛門と云へる浪人者が道場を構へ、柳生眞流と云

ふ看板を出せし由でござる、何故に貴殿は之れをお棄て置きに相成るや、早々其者を貴殿の道場へ招ぎ、彼れに柳生流の極意を何者が許せしやを相尋ね、若し曖昧たる返答に及ばず其場に於て斬り捨て、お了ひなさい』と表向き御沙汰に相成つたる事でございますから飛驒守も最早、知らぬ顔をして居るといふ譯には相成らず不憫とは思召したがお請けを致されまして、早速木挽町のお屋敷へお歸りになりますると、早々御家老の大道寺平馬をお招ぎになりました。飛平馬、今日御老中部屋に於て、松平左近將監殿より斯様々に仰せ渡された、余は聞かぬでもない、荒木又右衛門と云ふ者が牛込神樂坂に道場を開いて柳生真流と云ふ看板を出して居ると云ふことは豫

々聞いては居つたが、取るに足らざる浪人の事であるから其儘捨置いたれ共、斯く老中より御沙汰を蒙つて見れば最早捨置くといふ譯には相成らぬ、依つて其方太儀であるが、是より神樂坂の又右衛門の道場へ参り篤と様子を見て、大抵なれば彼れに此の江戸表を立たせる様にして呉れぬか、他の國へ乗込んだ上は、縦へ柳生真流と云ふ看板を出さうが何う仕ようが少しも構ひはないが、此の江戸では然う云ふ譯には行かぬから、依つて早々當地を出立させて呉れ、併し彼れが強情を張つて余の道場へ参るといへば致し方がない、不憫ながら彼れを手討にして了はんければならぬ、萬事其方宜きに取計らへ。平「委細承知仕りましたとございます」とそこで其日の未刻過

の頃ほひ、大道寺平馬は若黨草履取仲間などを伴れまして、最も立派なる風采にて、牛込神樂坂荒木又右衛門の道場へ遣つて参りました、成程表の看板には、

フシ「柳生眞流指南 武藝十八般他流試合 勝手たる

べき者なり 荒木又右衛門源嚴村 道場出張所」

これは甚い看板を出したものだと思ひながら玄關に掛り 平「頼む」と案内を乞ひますと、北斗武右衛門其所へ出て最も町噺に 武「誰方で在らせられますか 平「ア、拙者は當時木挽町五丁目に住居をする柳生飛驒守の家老大道寺平馬と申す者でござる、荒木氏に是非お目に懸りたく存じ参上致しました 武「是れは恐れ入ります、サア何

うぞ此方へ」と町噺に案内をして客間へ通し、此の所に待たせて置いて奥へ這入つて参りまして 武「先生、來ましたぞ、屹度是れは來るに違ひないと思つて居りましたので 又「何んだ、何にが來たんだ 武「木挽町の柳生飛驒守様の御家老大道寺平馬殿と云ふお仁が貴方に御面會したいと云つて見えました 又「成程、乃公も定めて來るであらうと思つて居た處だ、必らず心配するな乃公が面會する」と早速荒木は一刀を携へて客間へ遣つて参りました、先づ双方初對面の挨拶が濟みますると、大道寺平馬は荒木の立派なる姿を見て感心いたしました 又「エ、何んの御用でお出でになりましたか 平「されば拙者が参つたは餘の儀でござらぬ、主人飛驒守より其許に對し御尋ねい

たし度儀之れあるに依り、明日正巳刻を合圖に木挽町五丁目柳生の道場へお出で下し置かれない、如何でござるか 又「成程、夫は御遠方の御使者御苦勞に存じます、是れまでに當方より罷り出でなければならぬ筈でありましたが、ツイ御無沙汰を致して居りました、如何にも承知いたしました、夫れでは明日其の刻限を違へず屹度お目通りを致しに伺ひませう 平「ハ、ア、夫れではお出で下さるか 又「如何にも参りませう 平「ぢやアお間違へ無いやうに」と、固く約束を致し、暇を告げて大道寺平馬は當家を立出でましたか 平「ア、一困つたもんだ、彼の様子では必らず明日遣つて来るに違ひない、屋敷へ来れば命がないが、是りやア不憫なものだ……オ

、然うだ、今荒木が住んで居る家の家主と云ふ者が有るに違ひない、夫れへ一ツ申し含めて、密かに逃げさせるやうな工風を仕よう」と此の近邊にて聞合せて見ますと、直き此の向ふの豆腐屋五郎右衛門と云ふ者が家主であると云ふことが分つたから、そこで早速其家へ遣つて参り 平「五郎右衛門の宅は此方か 五「へいへい、私でございます 平「身共は柳生家の家老大道寺平馬と申す者であるぞ 五「ア、左様でございますか、何の御用でございますか 平「其方は荒木又右衛門の宅の差配を致して居るか 五「へいへい、左様でございます 平「實は身共は只今荒木の許へ参つたのであるが、彼れは將軍家の御膝下をも憚からず、無暗に柳生眞流と申す看板を出して柳生家へ

一應の挨拶もせぬと云ふのは甚だ不埒である、依つて明日柳生の道場へ彼れを呼んで、一應彼れの腕前を試した上、いよいよ怪しいと見做す時は其場で彼れを手討にして了ふと御主人が言ふて在らつしやる、そこで明日正巳刻に参れと申したら必らず参ると返答に及んだのだが、其方は家主であるから必らず取逃さぬやうに致せ、確と其方に申付けろぞ、若し又今晚の内に逃したら又右衛門が助かるだらうなぞ、思つて取逃してはならぬぞ、確と張番を致して居れ』と再三言合め、念を押して大道寺平馬は柳生の屋敷へ立歸りました、フシ「四方に使用して 君命を恥かしめず 流石に聞こえし大道寺 萬届さし計らいにて 主公へ斯くとは

通じたり」

五郎右衛門は何だか一ツ事を二度も三度も何だか譯らぬ言ひ振らだと思ひ、暫し間ヂツと考へて居りましたが 五「ア、成程、分つた、今晚のうちに逃げて了へば夫れツ限りだと仰しやつたのは、乃公に逃がすな遁がして了へと云ふ謎だ、ナアお上と云ふものは随分情深いものだ、是りやア乃公が行つて遁がして遣らう』と早速羽織を引被け荒木の道場へ遣つて参りました 五「へエお頼み申します」武右衛門其所へ立出でまして 武「オ、家主さんか、何んの御用か 五「へエ一寸先生にお目通りを願ひたうございます 武「ア、左様か……先生、差配人の五郎右衛門が参りました」荒木は一杯飲んで居りま

したが 又『早速是れへ呼べ……何んだ家主 五『甚いことを仰しや
 います家主とは恐れいつたね……エ、先生、他かちやアございま
 せんが、明日貴方は柳生様の屋敷へお出でになりますそうですが全
 くでございませうか 又『ウム、何にか知らぬが用が有るといつて呼び
 に参つたから明日は出掛けやうと思ふ 五『だがね先生、貴方は夫り
 やア腕に覺へが有るから行らつしやるお積りでありませうが、何う
 も相手は將軍様の御指南番ですからねえ、行らつしやると貴方の命
 に關はるやうに思はれます、寧ろ今晚のうちに、コッソリと當地を
 立退いてお了ひなさりやア夫れまで、ございませう、悪いことは申し
 ませんから大概ならば今晚のうちに遁げてお了ひなすつて何様は

ものでございませう 又『ヤイ、其方は甚だ以て不埒なことを吐す奴
 だ、汝は後難を恐れて店立に参つたな、逃隠れいたすやうな荒木又
 右衛門ではないぞ、明日柳生殿が拙者を呼ぶとあらば立派に腕前を
 顯はして見する心得、家主か蜥蜴の分際としていらざる事を申すと
 其分には捨置かぬぞ、素首打落すから、心に及べ』と言ふより早く
 一刀スラリと引抜いた、五郎右衛門は『ヤアツと驚いて仰向けに倒
 反り柱でゴツンと頭を打つた 五『先生ド何うか御免なすつて』と
 命辛々這々の体で遁げて去つて了ひました、跡で荒木は大口開いて
 カラ／＼と打笑ひ 又『何うだ武右衛門、五郎右衛門は腹を潰して去
 つて了つた 武『先生、威嚇しちやア往けません、手桶を引繰返して

臺所は水だらけで『イヤ驚いたらうと、言つたが其夜は休息んで終ひました、其翌日刻限を測り、

フシ「荒木又右衛門殿村は 黒木綿の紋付に 段小倉の袴を穿ち 三池傳太光世の大刀 忠吉の小刀を前半に 紺足袋撚緒の草履穿き 京の義教鍛へし鐵扇降ると見ば 積らぬ先に拂へかし 雪には折れぬ青柳の枝 金象眼にて入れたるを引提げ 死出の旅路にあらねども 罷り違へば命の瀬戸際」

尋常の者では往けないが天下の豪傑荒木又右衛門殿村殿、少しも怯

ます悠々として我家を立出で、木挽町なる柳生殿の屋敷を差して乗込んで参りました、表門に掛つて 又『お頼み申す……… 門「何處から 又拙者は牛込神楽坂に道場を開いて居る荒木又右衛門殿村と申す者、お召しに依つて参上いたしました、御家老大道寺殿へ此由お傳へ下されたし』と申述べる門番が此事を早速大道寺殿へ取次いだから平馬心中に荒木又右衛門といふ男は實に大膽な人物、よも参りはいたすまいと存じたに怖氣もなく乗込んで來るとは世の中に向ふ見ずのものもあるものだ、何はともあれ此室へ通せと言付ける、取次は畏まつて荒木を案内いたし一室へ通して待たせて置きました 又右衛門先生少しも油断せず八方へ眼を配つて居ります、其中正已

刻といふ時分になると遙か奥の方でカチ／＼と拍子木の音がする、之れは稽古の終つた報せと見える、暫くすると門人共大勢出て来る、いづれも旗本の面々、其頃は旗本の威勢は素張らしいもの、各々黨を分けて金銀入齒組だの又は四谷六方白柄組だのといふ名を付けて天下を横行する、實に仕末のつかない連中、今荒木の居る室の前を通ると兼松だの坂部だの又は松平近藤加賀爪などいふ氣の早い面々が、〇〇何うだ近藤今道場で話を聞いたが當時牛込神樂坂に道場を開いて居る荒木又右衛門といふ奴が来て居るそうだが今に柳生先生の前へ呼出されると手討になるんだが何處に居るだらう、△〇オ、此處に居るせ／＼大きな身體をして居るぢやないか、この位の者

を切りやア應へがあるな……」態と聞へよがしに悪口を吐いて通る、又右衛門先生、元より大腹中の方であるから耳にも止めず、燕雀何んぞ大鵬の志を知らんと笑ひを含んで泰然と扣へて居られます、暫時経つて大道寺平馬は其處へ入つて参り、平「イヤ荒木氏、昨日は大きに失禮いたしてござる、今日は早速の御來駕御苦勞に存ずる、只今主人に申入れた處速かに御面會致度仰せ、イヤ御案内仕る、又「イヤこれは御丁寧なるお言葉、然らば御免……」と又右衛門先生平馬の跡に續いてその儘奥へと進んで参ると廊下の傍へに家來三四名扣へて居て、〇「アイヤ荒木氏、暫くお扣へ下され度く又「ハ、ア何ぞ御用で、〇外ではござらぬが當家の家法として帶刀

の儘奥の間へ進む事を許さず、貴殿のお腰の物は此所にてお預かり申す 又「コレハ御念の入つたる事、御家法とあれば承知いたしました如何にも此所へお預け申す」と少しもためらふ氣色なく大小を取つて右の若武士に渡し其儘二間ほど打過ぎると此室にも同じく四五名の家來が扣へて居て △「エ、荒木氏一寸お待ち下さい 又「ハ、ア何んぞ御用でござるか △「當家の家法でござる此所にて貴殿の懷中物一切お預かり申す……」 又「左様か……」 又「右衛門先生仕方がないから亂箱の上へ懷紙、紙入、印籠等残らず入れる 又「一寸伺ふが、縦へ貴人高位の方々の前へ持參しても苦しからぬは此扇子でござるがこの扇は差支へござるまいな △「イヤ家法でござるから扇子たり

ともお預かり申す」と到頭此處で扇子まで取上げてしまひました、フシ「今は又右衛門先生も 身に寸鐵の用意もなければど 元來天下無双の名人 少しも怯する氣色なく其儘奥へ打通る」 然るに又々廊下の傍へに三名の家來扣へて居て ×「アイヤ荒木氏、暫時お止まりを願ふ……」 荒木先生變な顔をした 又「モイ拙者は何ももつて居らぬが……」 ×「イヤ當家の家法でござる一應衣類を解いてお改め申す……」 荒木先生少しムツとされたが元より大器量の豪傑 又「ア、家法とあればいかにも承知いたしました」とそれから袴を取り帯を解き衣類を脱いで夫れへ渡した、荒木先生裸躰の儘で

立つて居る、家來は「一々夫れを檢めて ×『宜しうござる御召し下さ
 い』又右衛門先生心中大いに怒つたが 又『モ一檢める所はござらん
 か ×『左様悉皆檢めました 又『イヤ未だあるであらう、拙者も斯く
 檢められた上は残すも氣掛りである、なせ拙者の下帯を外して檢め
 さつしやらぬ随分この中に小柄の二本や三本は隠せぬ事はない下帯
 を取れとなせ言はつしやらぬ ×『イエ夫れには及びません 又『貴殿
 の方で及ばぬと仰しやつても此方で及ぶのだ』と流石の荒木先生も
 立腹の餘り下帯を外して家來の頭の上でバタ／＼と振るつた、イヤ
 家來共は驚いて逃げていつてしまつた、扱又右衛門先生衣服を着し
 やがて道場へ打通ると平馬は暫らくお扣へ下さいといつて荒木を殘

して奥へ入つて行く、
 フシ「荒木先生道場の様子を見れば 流石にも 目さ
 むる計り立派な造り 正面の床の間には 正八幡大
 武神 香取鹿島の二柱神 注繩引きはへて灯を掲げ
 御前に瓶子を供へつゝ 四方の板壁には塗札に 白
 字をもつて門人の 姓名しるし掲げたり 上は將軍
 御連枝より 大名旗本數しれず 流石柳生の道場ぞ
 と 感嘆なして扣へたり」
 暫くたつて柳生飛驒守宗冬殿唯一人奥の間より立出で正面に座をし

める他には誰も居りません荒木先生は少し前へ進んで平伏いたす、
 飛驒守殿聲を掛け「飛」オ、其方が荒木又右衛門であるか早速の参向
 大儀に存する、予は飛驒であるぞ、見知り置け又「ハ、ッ麗はしき
 尊顔を拜し恐悦至極に存じ奉つる、計らすも御目通り仰付けられ又
 右衛門身に取り有難き仕合せに存じまする 飛「イヤ今日其方を呼び
 しは餘の儀でもないが、承はれば神樂坂に道場を開き、柳生真流と
 いふ看板を掲げ由る由、全体何者から柳生流といふ流名の許しを受
 けしぞ、柳生流とは當家より外にないが、何れの家の流を傳へたる
 か 又「恐れ乍ら手前儀は元伊賀國安部郡荒木村の産、諸國修業の途
 次大和國正木坂の御陣屋に於て、君の御雅兄柳生十兵衛三嚴先生の

御取立に預り其道場にあること満十ヶ年、お取立になつたる門弟一
 萬三千六百人の數多き中より、數ならぬ不肖の私しなれどもお見出
 しに預り、柳生流の極意を認めたる天地人三卷の書、並びに天狗昇
 飛切りの術霞隠れ霧隠れ真劔白刃取り等の秘法をお譲り下し置か
 れ尙又御名の一字を賜はり當時荒木又右衛門嚴村と名乗り居ります
 る、されば十兵衛公より相傳いたしたる柳生真流に聊か相違ござい
 ません 飛「ウム、何と申す然らば兄十兵衛殿の取立を受しと申すか
 又「御意にございます 飛「然らば江戸表へ参りし節何故當家へ参ら
 ぬぞ 又「恐れ乍ら其義は疾より心得居りましたる處、先年大坂堂島に
 道場を構へ居りし際、或日不在中隣家より失火いたし類焼の節、十

兵衛公より賜はりし大切なる天地人三卷の秘書を遂に焼失いたしました、夫故申譯なく存じ、今日まで差扣へ居りましたる次第……飛、左様か、道理である、併乍らたとへ秘書を焼失せしにもせよ、兄上のお眼識に叶ひ、數多き門人中より

「選出せし其方なれば 定めて眞劔白刃取りの

極意は腕に覺へがあらう 今幸ひに此所にて 汝が

腕を試すべし 覺悟に及べと云ふより早く 傍の一

刀引寄せて 抜く手も見せず立上り 眞向ニツと切

込んだり 劔道無双の柳生殿 翳す刃の其下に 逃

る、者のあらざれば アハヤ一打と思ひの外 天下

の名人荒木嚴村 飛鳥の如く身を開き 莞爾と笑を

含みつ、 疊み重ねて打つ太刀の 烈しき風を受け

んにも 身に寸鐵を帯ざれば 詮方なくて神前に

供へし瓶子の奉書を取り 劔の下を潜りつ、 名も

正眼の位に取り ビタリとこそは付たりけり 僅か

一重の紙なれど當代無双の嚴村が 其手にとれば正

宗の 劔にまさる業物よ 六尺餘りの其身さへ 奉

書の蔭に隠れつゝ、霞隠れや霧隠れ、霧立のぼる夕暮を、飛ぶ蜻蛉に異ならず、流石名譽の飛驒殿も、何れへ切込む隙もなく、只茫然たる計りなり」

道場の外には數多の門弟、大道寺、樋川等を初め、三四十名耳を澄して一心に聞いて居ります、暫くの間、兩人エイヤツと氣合を掛けて半刻ばかり一呼一吸を測つて居りましたが、飛驒守殿は荒木の腕前を見て、天晴無双の達人かなと感嘆なしたるから、飛「暫らく待てッ」とお聲を掛られました、又右衛門は是を聞くとバツと跡へ飛退り奉書を夫へ差置いて其儘ハツと平伏なす、柳生殿は一刀鞘に納めて、飛「イヤ天晴なる其方の腕前、慥かに柳生流の極意たる真劍白刃取りの

妙術を會得いたせしものと相見える、いかにも兄上お取立眼識を以て一萬三千六百人の中より選んで秘書を授け賜ひしも道理、殊に霞隠れ霧隠れの玄妙に至つては、飛驒も遠く及ばざる位、誠に當代並びなき達人なり」と聲を上げて御賞美になりました、又右衛門先生思ひ懸なく面目を施し、尙種々厚き待遇を受け其日は上々の首尾にて暇を賜はり神樂坂の道場へ立歸つて参りました、

「初め笑ひし人々も、君にも優る名人ぞと感ぜぬ者はなかりけり、後に至りて嚴村が、伊賀の上野の仇櫻、香りを後に傳へたる其生涯の事實譚は、一先

づこゝに止めまする」

荒木又右衛門 終

浪花節俱樂部口演

吉岡又三郎

フシ「今出川 盡ぬ流れの源を 尋ねて茲に八重垣の
 葉を残す一節は 節にちなめる吳竹の 太刀にも増
 る腕の牙え 語り傳へし吉岡が 其生涯の事實譚」
 今回は天下三名人の一人吉岡兼房齋の傳を言上いたします、この兼
 房は前名を又三郎といつて、京都今出川の染物屋の、紺屋治兵衛と
 いふ人の甥で幼き時兩親に別れ、據所なく伯父の世話になつて居り
 ましたが、元來利溲な性質でありますから十二三才になる時分には

モ一型付の仕事は一人前にやります、この型付といふのは細い縞柄の型を裂地の上に乗せて其上から糊を引く、そうして染上げてからこの糊を剃して仕舞ふ、其糊を引いた上に一寸蠅のやうな虫でも止ると細かい模様だと糊が滅茶々々になつて染上げてから揚りが悪いから團扇など吊して糊を引乍ら蠅を追つて居ります、又三郎は竹篋をもつて糊を引いて居る中、飛んで来る繩などを見當をつけて拂つて居りましたが夫が段々上手になつて来て此頃は何様な小さな蠅でもブーンと飛んで来るとバツと打落してしまひます、さうかと思ふと御飯を食べて居る時にブーンと蠅が飛んで来ると、自分の持つて居る箸でバチーリ打落すから、伯「又公穢ねえちやねへか蠅が香物の中

へ落こつた、併し此奴ア不思議なことをする……」さアこれが評判になつて、態々見に来る者がある、所が丁度或日の事京都は北山時雨といつて時雨は名物、フシ「サツと吹来る風と共に 俄に降出す村時雨 干したる物を濡らさじと 皆家々は立騒ぐ」
 其中で丁稚が二人紺屋には藍搔棒といふものがある、何か言合つたと見えて其棒を引張合つて居ります、所へ又三郎が飛んで来て、又「お前達は何をして居るんだ、こんな物を引張合つてどうするつもりだと突然持つて居りました竹篋を持つてブーンと棒の中央を打つと手練といふものは恐いもので、ポキーリと棒が二つに切れた、二

人の小僧は呆氣に取られ、「ヤア又さんが棒を切つたく」と騒いで居る、當人も我ながら不思議な事もあるもんだと棒の切口を眺めて立つて居る、

「俄の雨の事なれば 雨具もなく詮方なく 紺

屋の張場の此方へと 雨宿りして佇む武士 是れぞ

當代並びなき 劍客なりと聞こへたる 吉岡治太夫

先生なり」

今しも又三郎が篋を以つて棒を眞二つに致した有様を見て思はずも手を拍つて感嘆なし、斯かるものを手許に引取つて充分劍道を仕込

んだら將來天晴なる達人となるであらうと、名人の眼力は慥かなもの、早速治兵衛に面會して我望みを語り、無理に貰ひ受けて、又三郎を伴ひ、程遠からぬ同じ今出川の我道場へ立歸りました、さて是から先づ行儀作法から教へ、十六才の春より治太夫先生手を取つて劍術を指南する、元々劍道も何も知らぬ中から飛んで來る蠅を打落す位な腕前、そこへ當代無双の名人吉岡治太夫先生がみつしり教へるからその上達は驚く計り、二十才となる頃には門弟の中に手に立つ者もなく、お父上の治太夫先生すら三本試合の中、一本は勝を取られるやうになりました、此頃では又三郎がお父さんの代りをして稽古をする、所がどうも人には癖があるもの此又三郎先生は酒を呑

ひと気が荒くなる、酒亂といつてこれが爲め度々失敗る、治大夫先生も心配して種々意見もするがどうも直らない、併し剣道に掛ては流石の治大夫先生も舌を振ふ事がある位、丁度二十五才の時、又三郎先生吉岡流の極意飯糊付籠手返しといふ法を案出し、これを試さんとて門人の眉間を破つた爲、治大夫先生大いに怒り遂に又三郎先生を勘當いたすことになりました、又三郎先生お詫をしたが何といつてもお父様が聞かないから、ソコで又三郎も改心いたし、此上は天下を遍歴して名人の門に入り、剣術修業して天晴の腕前となり、其上立歸つてお詫をしやうと決心いたし、其儘京を立出で、諸國を經廻り、名人といふ名人に就いて修業をしたから忽ちの中に吉岡又

三郎の名は天下に響き渡るほどに相成りました、もう此上はお父上も勘當お許し下さるであらうと五ヶ年振りで京都へ立歸つて來ると豈圖らんや父吉岡治大夫は二年前に病死をいたされたとの事、ビツクリ驚いた又三郎が、

「さては此世に在さぬか 親の忌日も知らずして
 さまよひ居りし不孝の罪 これ迄養育下されし 御
 恩報じも致さずして 別れし事の悲しさよ 折角鍛
 へし腕前も 誰に見すべき爲なるぞと 怨み歎くぞ
 道理なれ」

最早先の道場も跡形なくなつて了つたから仕方がなく、その近傍の空家を借受け、吉岡又三郎といふ看板を掛けて剣術の指南をする、その中先の門弟共も集つて参り、又新規に弟子も殖て来たから今は又三郎も豊かに生活をするやうになり、名前を改めて吉岡兼房齋と名乗りました、此人は生涯絹布を着せず木綿の着物に小刀を帯し、一尺三寸の竹篋をブラ下げて京の市中を往來いたす、何しろ腕前が腕れて居るから吉岡先生々々といつてサア評判が高くなりましたが其頃京都市中に武藝者見立番付といふものが出来ました、兼房先生早速求めて見ると天下有名の武藝者宮本荒木石川澁川淺山などいふ人がズラリと並んで居る、西の大關は吉岡兼房としてあるから兼

房先生大いに恐縮してさて東の大關を見ると千葉幸内としてある千葉幸内とは聞いた事のない名前だから人に尋ねて見ると八坂の前に道場を開いて居る一刀流の先生だといふ、兼房先生どういふ名人が此京都に居る事を初めて聞いたから、大いに喜び、早速右の千葉幸内の許へ尋ねて参り、面會して見ると案に相違して人格の卑い強慢無禮なる人物、豫々吉岡先生の雷名を聞いて噴毒の炎を燃し、折あらば兼房奴を取押へて呉れやうと待つて居た所、今日計らずも道場へ尋ねて来たのを幸ひ、頭の上らん様に打据ゑて天下の耳目を驚かせやうと己れの未熟を顧ず、吉岡先生へ對して難題を言かけ試合を申込んだ、兼房先生初めは辭退して居たが遂に斷り切れず試合

に及ぶ、立合つて見ると吉岡先生とは天地雲泥の相違、美事に打据
 るられたを遺恨に思ひ、寧ろその事兼房を殺害せんと計り、表面は他
 意なき様子に見せて前非を詫び、酒肴を出して待遇しました、兼房
 先生自分が正直だから深くも考へず待遇さるゝ儘酒を過し、其夜の
 四ツ頃ほひ千葉の道場を立出で、我家へ歸つて来る途中、傍らの藪
 蔭に、

フシ「先廻りして忍びし幸内 物をもいはず突出す槍、
 先 天下の名人吉岡兼房 軀を開いて槍を掴み 其
 儘敷より引出して 月の光りに曲者の 面を見れば
 千葉幸内」

兼房先生酔た餘り疝癪が起つて来たから、其儘腰なる竹筥を取つて
 ビューツと眞向を打つと、何ぞ堪らん脳骨より鼻柱まで割付られ、
 血烟立つて打仆れる、酔が醒めて吉岡先生大いに驚き、此上は其趣
 きを届出でんと思ひ一先づ道場へ立歸る、此方は幸内の弟幸之進
 といふもの兄の方に非があるから届けもせず其儘内々に濟ませてし
 まひましたがいつかは此仇を報はんと企んで居ります、此方は吉岡
 先生元々先方から仕掛けた事だから先方で内々にすれば別に此方か
 ら届けるにも及ばぬと其儘に打捨て置きました、其後暫くは何事もな
 かつたが、丁度三月桃の節句、毎年大内にお鶏鬪の儀式がございま
 すところが吉岡先生の門人の中に片岡軍兵衛といふ者がありまして

軍「先生 兼「なんぢや 軍「貴方は大内のお鶏闘といふものを御覽に
 なりましたか 兼「イヤ大内において以前よりお鶏闘をお催しになる
 といふことは承つて居るが、未だ拜見をいたさぬ 軍「左様でござ
 いますか、随分御立派なものでございますよ、畏れながら一天萬乗
 の君が御覧在らせられます、それに就いて百官百司の方々も御覧
 に相成り、尙又町方の輩に至りますまで拜見が叶ひます、併し
 是れは手續きに依つて、御門を遣入る御門切手といふものを戴かね
 ば拜見が出来ないのでございます、先生往らつしやるなら、私共に
 一枚御門切手が渡つてありますから、お譲り申しても宜しうござい
 ます 兼「左様か、それは幸ひである、どうか拜見をいたしたいもの

ちや」左様ならば差上げませうと、それより吉岡先生は右の御門切
 手を貰ひまして、翌日早朝に起き上り、清浄なる御所へ参るのであ
 りますから、スツカリ身を清めてしまい、羽織留に短い刀を一本
 打ち込んだ、これはさういふ所へ参るのに、長い大小を差して行く
 のは失禮だと思ひますからで、衣類は木綿物でございます、藁草履
 を穿いて道場を立出で、御所へ参りまして、チャンと名前を申し入
 れ、御門切手を渡して、懷中物から何まで残らずお検査を願ひ、こ
 れなら通つても宜いといふのでズツとお庭へ通りますると、流石一
 天萬乗の君の在らせらるゝ御所だけありましてなか／＼嚴重なもの
 で、廣濶といたして居ります、遙か彼方の御殿の方を見れば、正面

の御簾の中よりは、畏れながら時の帝が御欲覽ましまして在らせられる、

「御前には關白殿 右大臣左大臣 大納言少納言 右少辨左少辨 百司百官殿上人 雲井に近き高貴の方々 列を正して控へたり」

町人の拜見する所は遙か此方の方でありまして、遠い所から見ますると、恰度豆人形のやうになつて拜見をいたして居ります、吉岡先生も町家の輩の中に交はつて居りましたが、皆吉岡の顔を知つて居るから ○「先生々々、貴方はズツと前へ出て拜見をなさい」といふのでズツと前へ出して呉れたから、ヤレ嬉しやと吉岡先生は一番前

へ出で、チャンと拜見をいたして居ります、ところが雑沓を防がんが爲に、此邊を固めて居りますは所司代板倉周防守殿の御家來主命として大勢此處に出張り巡見して居ります ○「鎮まれ」と雑沓を防いで居る、其中に交つて居ります一人は、前に吉岡又三郎兼房に討たれたる彼の千葉幸内の弟幸之進でありますが、見廻りに歩いて居たが偶爾と見ると、我兄幸内を討取つたる吉岡兼房が居りますから、さては吉岡が參つて居るナ、これは好い所で出會つたものだ、我爲には現在の兄の敵、此奴は天下の名人なれば、なか／＼尋常では仇討が出来ない、斯ういふ折柄であるから、ム、さうだと考へまして、朋友で一旦千葉幸内の門人になつて居た輩ばかり、其奴

等十四名の輩をば忽ちの間に語らいました、幸之進は恰度お鶏闘の
 始まらんとする前に、幸「騒がしいぞ、静にいたせ、御所内
 を辨へぬか、静にしろツ」と聲を掛けて参りますと、吉岡先生は固
 より武士の事でありますから、叮嚀に頭を低げてお在でになります
 折柄先岡先生の前へ突ツ立つた千葉幸之進、幸「ヤア不禮者奴が、此
 所を何處と心得て居るか、畏れながら御所内であるぞ、禮儀を辨へ
 ぬ馬鹿侍奴ツ」と突然持つて居りました鐵扇にて從容に頭を低げて
 居りまする吉岡先生の面部をばビシリーと打ちました、何にしる天
 下の名人ヒラリと首を轉つて、兼「御許下され」と再び頭を低げた、
 幸之進は、幸「ヤア此奴は我等に向つて抵抗をいたす奴だ、ヤアく

方々、捨置く事は相成りません、狼藉者でござるぞ、搦め取らつし
 やい、○「心得たり」と固より申合せたことでありますから、バラバ
 ラツと十四五名の輩が驅けて参り、吉岡先生の周圍をば取捲きまし
 た、此時吉岡先生は兩手を開け、兼「アイヤお役人衆、私しは懇懃に
 こそいたして居れ決して無禮致した覚えは毛頭ござらぬ、何故以て
 お咎めに相成りませぬぞ、○「黙れ、御場所柄をも辨へぬ狼藉者奴が
 不禮であるぞ、覺悟致せツ」と各々、鐵刀を以て打込んで参りまし
 た、これを見た大勢の町人共は、皆「ソレ喧嘩だ、」と哄と騒ぎ立
 ちました、千葉幸之進は、幸「ヤア方々何を猶豫し召さるか、早くお
 召捕を願ひたい、○「千葉氏、合點だ」といふ千葉氏といふ一言が耳

に這入りましたから吉岡先生、ハテナ、千葉氏といふ所を考へて見れば何の無禮もいたさぬ拙者に向つて、大勢の輩がこの有様、これは千葉幸之進が、先頃私が竹篋を以て討ち取つたによつて、兄の遺恨を晴さんとするものに相違ない、ア、悪い所へ陥入つたものぢや、兼「ヤア〜」汝は千葉幸之進であるか、兼「如何にも左様だ、兼「ム、左様か、最早早く相成る上からは致方がない上の御威光を笠に被つて罪なき者をば罪に陥し入れんとする、憎んでも尙飽き足らぬ奴ぢや、イザ来いッ」と、吉岡先生一時にムカ〜ツと癪癪が發つて參りましたから、兼「ヤア〜」一同の輩、よく承はれ、吉岡又三郎兼房は今日此所において斬死と覺悟を決めたり、左る代りには冥途の道

伴、汝等を討つて死人の山を築いて呉れん、左様心得よッ」と羽織留めに差して參りました小刀をギラリと引抜き、フシ「羽織を引脱き打捨て、一刀取つて身構へなし、邊りを白眼で突立しは、勇ましくも又物凄く、さうなく近付く者もなし」皆々「ソレ抜いた〜」と騒ぎ立てる、所司代板倉周防守様御家來衆も何か仔細のあることであらうと、手を束ねて居りましたが、最早禁中に於いて抜刀をいたしたから棄て置けない、家臣「ソレ狼藉者々々々」といふ騒動になりました、此時顛へ上つたのはお公家様でございまして、〇「鷹が〜、大變だ〜」とお立上りに相成り、町家

の拜見人は宛然鼎の沸返つたやうな有様でございまして我れ先にと
 争つて逃げます、これが爲にお鶏鬪は一時お見合せに相成り、御
 所のお庭前は轉倒るやうな大騒動でございませう、此方は御役人方
 が『狼藉者々々』と云ひながら八方から得物々々を持つて撃ち
 込んで参ります、吉岡先生最う斯うなれば致方がない、清浄なる御
 所内を汚すのは實に畏れ多いことながら、腕と目釘の續かん限り、
 斬つてく斬り捲らんと覺悟を定めたる臨終の際の動作でございま
 すから、その物凄きことは謂はん方がない、當るを幸ひ左右へ斬
 つて落す、

フシ腕は聞こえる吉岡流 刀は名代の五字銘忠吉

眞甲梨子割車切 又は唐竹矢筈斬 胴肩腕の嫌ひな
 く 突ては倒し切つては落し 千變萬化虚々實々
 右に顯れ左に隠れ 誠に變化の速かさは 巖に當る
 白波の寄ては返す如くなり」
 そのうちに此の騒動の發頭人千葉幸之進はこれだけの鬨ぎを惹起し
 たのですから自分は成るだけ吉岡の方へ近寄らないやうにいたして
 居ります、遙かにこれを眺めた吉岡兼房 兼『おのれ奸賊めツ』と云
 ひながら疾風の勢を以て飛び込んで参りますと、千葉幸之進は逸
 早く逃んとする、その脊後からヤツといふ聲諸共に後袈裟に斬り附

けたアツと一聲血煙立つて打倒れる、所司代板倉周防守殿の役人は御用々々と聲を懸けて居りましたが、吉岡兼房は最早他の役人には怨も何もない、一旦斬死と覺悟を定めたが運よくば此所を落んと多勢の役人を斬り倒し、バラ／＼と其の場を駆け出して参りました、サア斯うなると狼藉者を取逃がしてはならないといふので、御所の御門は何所も彼所もピッタリと閉つてしまひます、所司代附の役人は、召捕れ／＼と劇しき下知をしてお出でになる、然るに吉岡先生は御門が閉りましたから何所も出る所がない、向ふを見るとお圍ひの土塀がございます、飛鳥の如くに駆けて参りました吉岡先生、脊後からは海嘯の押寄せ来るがござき勢を以て、多勢の役人が追

つ駆けて来るから、吉岡は柔術も取る故變化も速かに、傍に立ちたの松の木に手を掛け、ヤツと云つて大地を蹴るかと思ふと、ツ、ツ、ツと攀ち登り、難なく土塀の上へ足を下し、偶爾と外面の方を見ますれば、はや外面の方にも固めが付て居る、内面よりはまた御用々々と聲を懸け大勢雲霞の如くに迫つて参りましたから、今はハヤ吉岡兼房も身軀茲に谷まつて兼ア、モウ致方がない、我死場所は此所なるか』と覺悟をいたし、血振ひなしたる一刀を取直さんとするところへ、多勢の役人の中から駆け抜けて参りました一人が、フシ「银杏穂の槍小脇に搔込み、禊鉢巻股立取上げピタリと附けたる其の動作 村雨ならぬ血煙りの

中に争ふ龍虎の武士

村雨八右衛門は、ハ「ヤア、吉岡三又郎兼房とやら、たしかに承はれ、汝も一流の劔道指南をいたすものならずや、當所を何と辨へる清浄なる御所内なるぞ、その御所内を騒がしたる大罪人、狂氣いたしたか、亂心に及んだか何故多勢の人々を猥りに傷付たるぞ、我こそは板倉周防守家來村雨八右衛門なり、覺悟に及べッ」と流々と槍を抜ひて、吉岡を望んで下から突出して参りました、すると自分の身體をば横に向け、ピタリと槍の千段巻をば掴んだ又三郎兼房「兼アイヤ此方は狂氣は仕らぬ、また亂心をいたす兼房でもない、我れは慎んでお鶏園を拜見いたし何の無禮も働かず、然るに我爲めに

最期を遂げたる千葉幸内の舍弟幸之進と云へるもの、私の怨恨を晴さんが爲に、多勢の仲間の輩を語らい、此の罪なき兼房をば召捕らんといたしたるに依つて已むを得ず抵抗を仕つたる次第、去りながら御所を騒がしたる罪輕からず、斯申す兼房は一命を捨て御詫いたす覺悟でござる、決して狂氣は仕らぬ、亂心はいたさぬ、只今最期を遂ぐるから、その死狀をお見届けを願ひたい、くれぐれも狂氣ではござらぬ、亂心ではござらぬぞ」と三度四度大音に繰返しながら、血の染いたる一刀を取直し、左の手に掴みましたる槍を突き放し、お圍の上にドツカと腰を下ろし、右の手に持つたる一刀をば我が腹へブツリと突き込んだ「役ソレ、吉岡がッ」と一同の役人

が下から見上げますると、サツト流れまする血汐、實に武士は最期の際が肝腎であつて、天下の名人吉岡兼房が卑怯い死状をいたしたと云はれては、死後の恥辱と思はれてか、腹一文字に掻裂いて、その刀をば口に啞へ、遙かに土塀の上から外面を望んで飛び下りたが何分真劍を口に啞へて落ちたのであるから、柄の頭が大地に打ッ突かる、その途端に真劍が咽喉から後方へ先切白く貫いた、實にどうも立派な最期でございます、この折柄役人の方の怪我人といふものは、實にその數が分らないといふくらゐ、尤も此時吉岡兼房の道場へも捕吏が抗つて居りますると兼房先生のお配偶者はおまき殿といふ婦人だが、流石は吉岡先生の妻だけありまして、充分に靜流の

薙刀を心得て居りますから、群がり立つて参ります、多勢の捕吏をば、三度まで追還したと申します、斯くておまき殿は靜かに奥室へ這入つて、スラリと短刀を抜き放し、美事に自害をいたして相果てました、實に揃ひも揃つた御夫婦でございます、そこで此の趣きを村雨八右衛門より板倉周防守殿へ言上致しますと、板倉周防守殿はこれをお聴き遊ばして御所をば騒がしたる罪輕からずとは申しながら、惜い者を殺したりと、大きに力を落されました、併し尋常ならば、その死骸に充分の御成敗もあるのでございますが、格別のお慈悲を以つて死骸は門人共にお下渡に相成りました、これを承はりましたる天下有名の武術家は、何分名人の吉岡が斯ういふ死様を

いたしたのでありますから、悉皆京都へ上つて参り、上を憚つて立派な葬式を致し兼るから、皆な寄つて集つて、密に懇なる葬式を致しました、實に惜い先生を死なしたもので、これが有名なる吉岡又三郎兼房先生の傳記でございます、扱て兼房死して後に、此の流れを汲んだ者がございまして、八重垣流飯糊い附けといふ形を後世に残しました、後に至つて勤王の大志を懐き、武名を天下に轟かしたる、慶安の豪傑由井民部之介正雪は、最も吉岡先生の風格を慕ひその流の極意を極めて、八重垣流の小太刀は殊に名譽であつたと申します、

「朽もせぬ 其名ばかりを止め置きて 枯野の尾

花 遺物にぞ見る 其身は空しく朽れども 武名は今に今出川 流れはつきぬ源や 武門の神と仰がれし 吉岡兼房の生涯譚 之にて終局といたします」

吉岡又三郎 終

宮 本 武 藏

浪花節俱樂部口演

フシつるす太刀たち 光ひかりはななどか闇くらからん 名なも隠かくれなき
 宮本みやもとが 其誠心そのまごころに天照あまてらす 神かみの威徳ゐとくもさしそひて
 名なさへ神免しんめん二刀流とうりゅう 譽ほまれを後のちに傳つたへたる 武藏正名むさしまさな
 の一席せきを」

此この宮本武藏正名みやもとむさしまさなといふ人ひとは真まことの英雄えいゆうでございます、一代いちだいの名吟ないうたと
 云いふのが『貧まうしきも樂たのみはあり梅うめの花はな。武士ぶしの音新おとあたらしき扇あふすかな』



先づ是等を見ると餘程風流の方でありました京都東寺の本堂に此人の書いた山水の繪があります、又尾張の笠寺にも牡丹の圖が残つて居ります位、實に文武の道に勝れたる人物此人の生國は何れかといふと播州平福郡宮本村に神免武右衛門といふ人がある、先祖は赤松入道圓心の後胤にして、能く二本の十手を遣ひました、夫婦の中に子がないから當國五岳山の觀世音に祈誓を籠め或夜善財童子が口中より胎内に入ると夢見て妊娠いたし月満て産落したのは玉の様な男の子、父の一字を取つて武藏と名號けました、之れが後年天下三名人の一人宮本正名先生でございます、追々成長して十三才の頃になると自然劍道の奥儀を悟り家に傳はる二本の十手は畢竟賊杯を捕へ

る爲にして戦場の用に立たず、武士は大小を挾さむ者ゆる、之れを劍法に改めなば宜からんと考へ、種々工風して神免二刀流十字の構へといふものを案出いたしました、十五歳の時仔細有つて親子打連れて江戸表へ出て住居して居りました所、縁有つて豊前小倉の小笠原右近將監殿に召出されましたが、武藏も共にと仰せあるを固く辭退して未だ藝道未熟なれば暫らくの間修業いたし其後御奉公仕るべしと申上げて、其當時小石川白山下に道場を開いて戸田流の劍道指南をする石川群東齋巖流先生の門に入り五ヶ年の間修業いたしました、モ一二十才となるとさしも門人多數き石川先生の道場で宮本武藏殿の右に出るものがないといふ位になりました、然る所こゝに

肥後の熊本の浪人にして佐々木玄刀齋岸柳といふものがございます
 余程剣道に達して居るが頗ぶる強慢無禮の人物、當時世間で同じや
 うな名前であるから石川先生を東の巖流、この佐々木玄刀齋を西の
 岸柳と呼んで居ります、岸柳は性來邪智に長たる奸人でございます
 から、石川巖流が當時江戸表に於て門人を取立て殊に水府公の御館
 へお出入をして飛鳥を落す勢であるといふ事を聞いて大いに嫉み
 江戸表へ乗込んで巖流を打据る、天下の耳目を驚かせんと企て之を
 門人の澤田奎左衛門といふ者に相談いたすと奎左衛門のいふには、
 もし江戸表へおいでになつて石川巖流を打込めばよいがよし敗を取
 らば先生のお名折、之れは寧ろ手前が先生のお名前を拜借して佐々

木岸流と名乗り江戸表へ乗込んで石川巖流と立合ひませう、もし立
 合つて打勝てば先生の御名譽、不幸にして打敗けた所が門人澤田奎
 左衛門であると名乗ればお名前に瑕はつかぬ道理此義御承諾を願ひ
 ますと勧めたから岸柳も大いに喜び早速出立いたさせました、澤田
 奎左衛門は佐々木岸柳と名乗つて門人押田佐七柏木彦助青山文平の
 三人を伴れ江戸表へ乗込で参り小石川の石川先生の道場へ來つて他
 流試合を申入れると石川先生は水府御館の仰せとして他流試合は一
 切致さぬといふ規則であるといつて断りました、岸柳も規則とあれ
 ば仕方がないから此上は一つ石川の荒膽を挫き吳んと程近き富坂下
 に道場を造り、

フシ「肥後熊本浪人 佐々木玄刀齋岸柳 無敵流指南
 十本詰まで望みに任す 他流試合勝手たるべきもの
 なりと いふ堂々たる看板掲げ 傍若無人の有様な
 り」

其中追々手を廻して門人を取立て尙又門人の口を以て石川巖流の事を小兒の如く罵る、打てば響く譬への通りいつか之が石川の道場へ聞える、門人共は大いに怒つて中には佐々木の道場へ出張して岸柳奴を打据へんと敦圀く連中もあるが巖流先生は大腹中のお方であるからお氣にも止めず捨置け〜といつてお出でになる、そうこう

する中に佐々木の門人共は追々増長いたし石川巖流も我々を恐れて手出しをせぬといふのは呆れ果たる腰拔武士、犬侍であるといつて石川の門人達が往來を通行するを待て喧嘩を吹掛け又は大勢で打擲する此事をお聞になつて巖流先生もう勘忍袋が切れ此上は道場へ乗込んで岸柳を取て押へんと思し召したが生憎御病氣、致方がないから門人を名代に遣さうといつた所で先方も頗ぶる達人との噂さ尋常の者では敗れでも取ると耻辱を重ねる道理、これは宮本を遣さう武藏より外に適當なる者はないと思召し、早速武藏殿を呼んで右の次第を話しお頼みになりました、武藏先生元より岸柳を打据へたく思つて居た所早速御受合申して、支度をなし時を移さず富坂なる岸

柳の道場さして乗込んで参りました、併し石川の門人と名乗つては先方で用心するから、小笠原の家中宮石武助と變名して他流試合を申込む、岸柳、天下の名人宮本先生とは夢にも知らず、早速試合に及ぶと腕前は天地雲泥の相違、
 フシ「忽ち竹刀を打落され 驚く手許へ付入つて 眞
 向微塵と打据ゑたれば 何かは以て堪るべき ガツ
 クリ後方へ打仆れる」
 武藏先生大眼見開いてハタと睨み 武宮石武助とは假の名、誠は石川巖流の門人宮本武藏正名なるぞ、汝未熟なる腕前を 顧す無敵流
 なぞ、人も無げなる看板を掲げ、而已ならず尊師石川先生を惡さま

に罵る言語同断の曲者、格別の慈悲を以て一命は助け遣す以後を慎め」と言捨て表へ飛出し看板を打毀して其儘石川先生の道場へ歸り此由を申上げたから巖流先生手を拍つて賞賛なし大にお喜びになつた此事が市中に聞えたから武藏の評判は大したもの、然るに岸柳の奎左衛門は遺恨やる方かく何卒して武藏奴を打果さんと密かに時機を窺ひ、或日の事宮本先生が森大内記殿の御招ぎに應じ目黒行人坂なるお上屋敷へ参上いたせしを幸ひ、歸途を待つて行人坂の麓にて三名の門弟と共に待伏なし、不意に切つて掛つたが、何條宮本先生斯る者の及に命を落すべき、見る／＼中に奎左衛門を始め青山文平押田佐七の三名其場に切仆され、柏木彦助は命辛々逸失しました、

武藏先生ニツコリ笑つて神田橋内なる自宅へお歸りになりお父上武左衛門殿に右の次第をお話しになると武左衛門殿大いに驚き、聞く所によれば岸柳は悪人ながら剣道の達人取立の門弟在府在國を合して二千餘人もあるとの事、その門人師匠が討たれたりと聞かば定めし恨をなして其方を仇と付視ふであらう、譬へ取るに足らざる木の葉武士にもせよ無益の殺生を致さねばならん夫よりは此儘當地を發足して二三年の間諸國を經廻り武術修業をなして餘熱を冷すが宜しからん石川先生へは此方よりよろしく申上て置くから早速出立いたせといふ親子の情愛は別なもの、宮本先生別段岸柳の門人が千や二千あるからといつて少しも恐れるやうな方ではない殊に非ば先方に

あるから差支へないが年老し父上に御心配を掛けては相濟まぬと、元來孝心深き正名殿、父の仰せに隨がひ、石川先生へは一通の書面を認めて父上に預け、其儘上方を志し江戸表を出立致しました、
フシ「住馴れし●東の空を後になし 片しく波の袖ケ浦 七ツ八ツ山御殿山 聴て越來る川崎や 軒端並ぶる神奈川も早程ヶ谷の程もなく 暮て戸塚に宿るらん 紫匂ふ藤澤や 翳し見る手の平塚も 何日かゆかりの大磯よ 早小田原を過ぎぬれば 伊豆路に越ゆる玉櫛司 箱根の山は此所なれと 草鞋の紐を

引締めて かゝる難所の峠道

宮本先生急いで山道をやつて参りますと一人の駕籠屋が傍に駕籠を下して休んで居ります。○「お武家様々々、貴方はこれから三島へお出になるのでございますか。武ム、左様だ。○「何うも朝つから外れて一文にもならないで困つて居るんですが、駕籠に召して下さる譯には参りますまいか。武「何さま少し歩き過ぎて足を痛め殊に山道といひ道も捗ごらず案外刻限も後れたごうせ山中で日の暮れるのは覺悟であるが、幸ひの折柄乗つて遣さう、併し三島まで何程ぢや。○「へい棒組なしの一人駕籠、幾らでも思召しで宜しうございます。武「棒組なしで如何して擔ぐ。○「へエナニ片方へ石公つてえ堅え男

をブラ下げるんで、へまな棒組を頼むより結句氣樂でございます。都合に依つて休まうともモー一踏張り歩かうと相談なしでやれますから御心配なくお召し下さいまし』といふのを聞いて宮本先生、駕籠昇の顔をヂツと見ると、

フシ「眼中鋭く光りをなし 筋骨いとも逞しく 目鼻立さへ卑しからず 年齢三十二三才 實に一器量あるべきもの 斯る業をなすといふも 何ぞ仔細のある事ならんと 不思議に思ふ宮本が」

武「ウム然らば鳥目を五百文遣すがそれで行くか。○「エ、五百あり

や今夜酒の一升も飲んで木賃宿へ泊られますから結構でございます
 どうぞお召しなすつて下さい 武『そうかそれでは大儀ながらやつて
 呉れ』と其儘武藏は駕籠に打乗る、如何するかと様子を見て居ると
 ○『ヤイ棒組しつかりやつて呉れ』と云乍ら凡そ一抱へもあるやう
 な大石を太い縄で十分に捌げそれを駕籠の後棒にブラ下げ、自分は
 前へ廻りヤツと一ト息力を入れて肩を入れるかと思ふと苦もなく駕
 籠を擔上げた ○『旦那下手な者が二人で擔ぐより斯うやつて一人で
 やる方が揺れなくつて宜うございませう 武『ウム大きにさうだ然し
 餘程の大力だな ○『ナニ別段大力といふ程でもございません尋常で
 ございます』と其儘ドン／＼足に任して山道を歩いて行く、駕籠は

休まないが大分手間が取れる 武『若い衆や ○『へい 武『駕籠は休ま
 ぬが大分時間が掛るではないか ○『へエ實は草鞋を穿いて居りませ
 んから、砂利場で足が痛くつて叶ひません 武『無法な事をするでは
 ないか草鞋を穿いたら宜からう ○『草鞋を買へば十八文錢を取られ
 ます、十八文錢がありやア旦那酒の二合や三合飲めます、少し位我
 慢しても酒を飲む方が宜いんで 武『ムム餘程貴様酒好と見えるな…
 …』其儘二里の餘もドン／＼急いで参りました、
 フシ『其中日も早や暮れはて、 埒に急ぐ群鴉 何處
 の寺の鐘なるか 數へて見れば六ツの數』
 武『コレモー暮れるな、未だ三島宿には餘程あるか ○『へい未だ少

しごさいます、ナニ御心配にやア及びません私しや夜びて擔いで居たつて草臥れやアしませんから、眠くなつたらお休みなさいませし擔いで行くのは平氣ですが何分跣足で足が痛くつて叶ひませんからチヨイト茲で一息休まして頂きます、就ちやア甚だ申し兼ねましたがお鳥目を二百文計りお貸し下さいませんか 武「ム、二百文如何いたすな。〇「へエこの山の向ふに例も茶店がございますがモー日の暮で店を仕舞つて爺の歸る時分ですから、チヨイト駈付て一杯グツと飲つて参りたうございます」稀代な奴の駕籠に乗つたと思つたが 武「ム、兼ねて其方の申したのは聞いて居つた、それでは一杯飲んで参るがよいと懷中から二百文鳥目を出して渡してやると 〇「有難

うございます』と駕籠屋は喜んで飛んで行く、武藏は不思議な奴もあるものと考へて居たがフト自分の駕籠を見ると木の股へ駕籠の棒を引懸け宙に吊してございます、イヤ大變な事をする奴だと流石の武藏先生も驚いて居る處へ、暫くたつて例の駕籠屋、一杯飲んだと見て眞赤な顔をしながらヒヨロ／＼戻つて來た 〇「エ、イ、旦那様有難うございました 武「オ、駕籠屋か如何いたした 〇「へイグツと一杯やりました、所が何うも朝の疲んが出てポカ／＼暖まるにしたがつて身體がグツタリして眠くなつて來ました、甚だ申し兼ねましたが一ト寐入り寐かして下さい 武「コレ日の暮れるにそんな事をしでは困るではないか 〇「へイグツと一ト寐入りやりさへすれば起き

て一生懸命にやりますからどうか少々御免なすつて下さいまし」と木の根を枕にゴロリと寐たかと思ふと白河夜船の高野、前後不覺に寐入つてしまふ、さてく妙な男もあるものと武藏先生は不思議に思ひ様子を見て居ります、

フシ「其中早や日はくれはて、四邊は暗き木下闇

吹來る風に傳はりて、長く吼へたる其聲は何もの

なるかと伸上り、駕籠の中より見てあれば遙かの

杉の木間より、星に均しき眼の光り、さては正しく

狼なるか、こは幸ひの腕試し、殺生なれど斬棄て呉

れん、必らず一匹切る時は、數十疋の狼共、集り來

る事ならん、こはよき慰み御參なれと、武藏は一刀

取直し柄に手をかけ身構へたり」

狼は早くも駕籠の傍へ近寄り大きな口を開いてキヨロク、其處

等を見廻すと例の駕籠昇は平氣で木の根を枕に寐入つて居る、狼は

オーウと吼へて飛付かうとするが、寐て居る男の鼾の聲がグーツグ

ーツと響くから流石の狼も鼾に驚いて跡へ下つて考へて居る、

フシ「武藏は駕籠より飛出、抜く手もみせず一刀に

バラリズンと切つて落す、キヤツと叫びし狼の聲

を聞くより忽ちに 數十匹の狼共 四傍の谷間木の
間より 集まり来つて押取巻き 武藏を目懸けて飛
付く有様 心得たりと宮本先生 同じく左の抜打に
同じ枕に切仆す 腕は神免古今の名人 刀は業物十
字の構へ 右劔に切立て左劔に突立て 突いては拂
ひ切つては落し 縦横無盡に働く有様 見る／＼中
に狼の 死骸は積んで山をなし 血汐は流れて泉な
す 見る眼眩ゆき計りなり」
此時物音に目を覺して「ア／＼と起上つて、駕籠昇、イヤア始まつた

く、旦那始めましたな 武「始めたごころではない、其方は酷い所
へ連れて参つたな、コレ見ろ、まだ澤山居るわ……」
「〇マア何十匹でもおやんなさいまし人助けでございます、ナニ斯んなものを殺
すに刃物を用いるにやア及びません、ドレ私も少しお手傳ひ申しま
せう」と、
「シ」大手を廣げて突立上り 飛來る奴を引外し 首
筋擱んで傍なる 岩を目掛けて打付くれば 胴躰二
つに分れたり 續いて飛來る狼を 或は打据る打殺
し 足にて蹴仆し踏殺し 片端より引提げて 谷間

へ投込む其有様 尋常ならぬ力量と 勝れし武術の腕前に 天晴名譽の達人かなと 烈しき中にも宮本は 感嘆なして居たりけり」

流石箱根の狼も斯ういふ豪傑に出會つては仲間の種が盡さるから 驚いたものと見え右往左往に散亂なし先を争つて逃げ去りました、武藏は一刀の血を拭つて鞘に納め彼の駕籠昇きに打向ひ 武驚き入つた其許の腕前、由ある人とは最初より承知いたしたれど斯る達人とは知らず粗略なる言葉遣ひして、失禮の段幾重にもお詫申す、シテ其許は如何なる方の斯くばかり、姿を替へて在するぞ、お差支へもこれなくば、御姓名を承知いたしたく存する』と叮嚀に相尋ねた

時にかの男ニツコと笑つて ○イヤお賞めに預つては反つて恐入ります、旦那様こそ失禮ながらお年齢に似合す天晴名譽のお腕前、私などは只好きでホンの少し習つたばかり元より往來の駕籠昇風情、姓名などはございませぬ 武「イヤお包みなるな、最前より認めし眼は慥かな證據、然し人の姓名を聞かんと欲せば、先づ我名を名乗れとやら、某は江戸表小石川白山下なる石川群東齋巖流の門人、豊前小倉の城主小笠原右近將監の家中宮本武藏正名と申する者でござる ○イヤコレは豫て石川先生の門下に其人ありと承はりし宮本正名先生で在せられるか、今は何をか包むべき、手前事は紀州和歌山の藩中當時浪人關口彌太郎重勝と申す者でござる』と始めて明す己

が本名、聞いて驚く宮本が、武は扱は豫々御雷名を承はる關口先生にて在せしか、お目に懸るは今宵初めて、思ひ設けぬ幸ひでござる併し乍ら關口先生ともある御方が何故あつて斯かる業をなさるゝか
關「イヤお尋ねに預つて誠に汗顔の次第、實は少々仔細あつて紀州家を浪人いたし、其後は格別祿も望まねば二君に仕へる心もなく、其日の活計なきまゝに御覽の如く尾羽打枯らし、諸國を徘徊して、貴殿の如き武者に、巡り合ふのを樂しみに月日を送り居りまする貴殿こそ如何なる故あつて、廻國修行の扮装にて、斯くは通行なさるゝぞ 武「されば仔細は申さねば相分らんが實は斯々此々の次第……」と彼の一伍一什の物語りを致しました關口先生聞終つて 關

ハテ合點の行かざる事、佐々木岸柳といふものをお討ちなされたか 武「いかにも切捨てました 關」その岸柳といふものゝ人相はごういふ風でござつたか 武「さればでござるそれは斯々いふ顔付……」 關「それは眞の岸柳ではござらぬ、某先年九州地方を修業いたせし際、熊本に於て佐々木岸柳を尋ね、一本手合せいたせし處、何さま頗ぶる名譽の腕前、殊に燕鱗の太刀といへるものに妙を得たるものにて今貴殿の語らるゝ人相とは餘程違ひます、事に依つたら其奴は岸柳の門弟澤田奎左衛門といへる者に相違あるまいと存ずる 武「ハ、ア 關」強情我慢の偽岸柳、貴殿の爲に横死を遂げしは片腹痛き事共なり、併し其許これよりして若し岸柳にお出遇ひなされし時は御油斷

あるな、彼奴が燕鷲の太刀は餘程妙を得て居るから下の勝負は危や
 ぶい身を軽くして宙を飛ぶことを心懸けられよ、幸ひ今宵御面會い
 たせしは何より某の家に傳はる天狗昇飛切りの術といふものがござ
 る、之は子孫相傳の秘法にて徒らに人に傳ふべきものならねど、外
 ならぬ天下無双の宮本氏の事なれば、今宵只今お傳へ申さう 武「エ
 ツイヤ夫れは何とも忝じけないお禮の申やうもござらぬ 關「何の武
 士はお互ひ、イザ此方へお出であれ」と、
 フシ「先へ案内ふ關口が 情は深き杉木立 梢を洩る
 月影を 明りとなして一刀引抜き 傍の立木の枝
 を切落し 木劍三本作りつゝ 武藏は兩刀 彌太郎

は 一刀青眼に構へつゝ 氣合を計り矢聲をかけ
 上段下段と打合つたり 一人は神免二刀流 極意を
 究めし宮本正名 一人は直眞影流の秘術を悟る關口
 重勝 いづれを櫻いづれを梅 優り劣らぬ兩雄が
 晴の勝負と精神をこめ 暫しの間戦つたり 宮本い
 らつて打込む右劍 搔潜つたる關口が 姿はいつか
 白雲の かゝる梢に飛び上り 容は見へずなりにけ
 り」
 是は不思議なりと宮本正名 武「アイヤ關口氏には何處に在したまふ

ぞ 關「宮本氏、此處でござる」といふ聲を便りに振り仰いで見れば
二丈あまりの杉の立木の、梢の上に腰を掛けて居る、流石の武藏先
生も大いに驚いて 武「イヤどうも關口氏、其許は不思議な術をお使
ひなさるな 關「ハ、これが即ち天狗昇飛切りの術家に傳はる秘
法でござる……」と笑ひながら梢の上にて身を躍らせるかと思へ
ば、いつか地上に飛降て宮本先生の前へ突立つた、武藏はいよ／＼
感嘆して 武「イヤ玄々妙々の秘術 某も未熟ながら戸田流を學び且
又神免二刀流を案出して随分名譽の方々と立合もいたしたが、未だ
斯ばかり不思議な術に出會つた事がござらぬ 關「イヤ御道理、これ
は武藝名譽の方々でも大抵御存じない、當時此秘法を傳ふるものは

大和國正木坂の陣屋に居らるゝ柳生十兵衛三嚴先生と、不肖ながら
關口彌太郎より外にござらぬ、併しながら此術は教ふると雖ども武
藝未熟の者では行ふこと能はず、其許は神免二刀流の極秘に亘り、
天晴れ名譽のお腕前なれば、この術を會得する上は虎に翼を添へる
やうなもの、拙者も斯かる達人に傳へ置くは何よりの喜び、イザ是
より天狗昇飛切り霞隠れ霧隠れ 術、残らずお傳へ申すべし」と
此處に於て關口彌太郎先生が宮本武藏正名殿へ右の秘法 悉く相傳
いたしました、武藏正名彌太郎先生の手を取つて大いに喜び 武「斯
かる妙術を得し上は、岸柳ごときに出遇へばとて恐るゝに足らず、
譬へ彼燕翻の太刀を使ふにもせよ美事腦上微塵に碎き呉れんと勇み

喜ぶ有様、關口も心嬉しく、其夜は終夜語り明して、
 フシ「東天紅を現す頃 後日の再會約し 袖を分ちて
 行雲の 鳴くや關路の朝鴉 別路止むる逢坂の 關
 にはあらぬ箱根山 杉の群立すぎ行けば 人聲遠く
 なるまゝに 見送る關口見返る宮本 別れ行方は筑
 紫瀉 豊前の小島に岸柳を うちて其名もいや高き
 武藏正名の事實譚 之にて止め置きまする一

宮本武藏終

浪花節俱樂部口演

井伊直人

フシ「黒塚に あらねど同じ陸奥の 鬼夫婦よと謠は
 れて 時にも世にも青葉山 其名は今も傳はりつ
 譽を残す一席を」
 エー「今回はお勧めに随ひまして、仙臺鬼夫婦と題し井伊直人、同さ
 だ女のお話を申し上げます、此の井伊直人といふ人は奥州仙臺伊達陸
 奥守政宗殿の御家來で八百石を頂戴いたし、御指南番を勤めて居り
 ました井伊直江といふ者の子息でございます、ところが年齢十九二

十となつて参りますと、ソロ／＼好い事は稽古しない、悪い方の道ばかりを覺えます、尙又親もなく自分一人で誰も頭を押へる者がございませぬ、人間は衣食住に不自由がなくなるとおひ／＼増長して他の愉快をば貪るやうなことに相成ります、直人もそれなんで、此頃は頻りに賭弓といふ事をいたします、直人は是れが大層好きで金を賭つて争ふて居りましたが、金を賭けて行るのですから一切夢中でございます、稼業人の手に掛けますと子供のやうなもので、宜い工合に見せ掛け、直人の對手をして金を絞取り、巧の手段に罫り夢中になつて行つて居りますから幾ら金があつても堪りませぬ、ド／＼取られますので親直江の時分には内福と云はれましたが、い

まは有金は悉皆負けてしまひましたけれども少しも止めない、家の結構な物を質入或は賣却をして、是も負けてしまひます、その次には衣類其他何でも彼でも手當り次第に賣却つて、これも取られてしまひます、親類の者も意見を加へますが、中々勝手氣儘に育つた直人ですから少しも聽きません、此頃では宛然屋敷に伽藍堂のやうなもので、疊建具も殆んどないくらゐ、仲間小奴下女も皆呆れて暇を取つて往つて終ひまして、唯一人庄助といふ六十九歳の爺、これは直江の代より奉公して居りますから、忠義に勤めて居ります、家中の者は擯斥をしまして、誰も井伊直人と交際ふ者が無い、往來で出會つても彼の親不孝者奴、阿呆侍奴がと云つて物をも云はない

やうに致します、當人一向平氣で相變らずやつて居ります、然るに妻のおさだといふのは同藩の雜刀指南役を勤め、千二百石の祿を頂戴いたす眞砂三十郎といふ方の息女、縁あつて直人がまだ裕福に暮して居る時分嫁に參り、借老の契りを結びましたが、父の教を受け、て文は元より武藝の道さへ嗜なん、容色は眞砂小町と呼ばれるほどの美しさ、心ざま賢こく、實にぞこといつて申分のない婦人でございませ、嫁に來てまだ二年とたぬ中に直人の亂行持參金として持つて來た五百兩の金子から、衣類髪飾の類まで悉皆持出されてなくなしてしまふ、こんな調子ですから堪りません、今は夫婦とも着のみ着のまゝ、それでも苦い顔もしないで夫の機嫌をとつて居りま

す、直人はソロ／＼實家の眞砂三十郎殿の方へ無心に行つて來いと
言付るやうになる、お貞は別に厭な顔もせず實家へ參つて無心をい
ふ、親御の三十郎殿も別に厭な言もいはないで三十兩五十兩と貸與
へて居りましたが、もうその金もつもり／＼て三四百兩になりまし
たからさすがの直人も少しは氣が咎めると見えて今日はボンヤリと
火鉢の側に坐つて居りましたが、直貞や、眞ハイトいつて來るお貞
の姿を見ると嫁に來たときの華麗の姿に引換へて、見るも哀な有様
になつて、面やつれのした顔を見ると、直人も何ぼ何んでも面目な
く下俯向て、直貞や、私が心得違ひから親類朋友の意見もきかず、
家財道具まで賣拂つて賭事に費し、お前にもいろ／＼苦勞をさして

何とも申譯がない、流石に此頃は氣が咎めて来た、併し賭事は一つ
 旨くいけば今までの取返しがつく、どうか私にモ一ト勝負さして
 呉れないか 真「ハイ 真お前がお父様に絶つて今一度百両だけお借
 り申して来て呉れ、それも貞けて取られるやうならモ一斷然思ひ切
 つてしまふから、定めし真砂殿御立腹であらうが、そこは眞實の親
 子の間柄、程よ、云ひ繕つて呉れ 真「畏まりました、早速行つて參
 ります」と其場を立つて、支度をなし、其儘實家の眞砂三十郎殿の屋
 敷へ參り、お父上にあつて右の次第を話し、百兩の金子の無心を申
 します

フシ「三十郎殿つくづく」と

娘お貞が姿を見れば 昔

にかはる哀の有様 幼き時より美しく 蝶よ花よと
 育てし身が 今の姿は何事ぞと 夫のために耻を捨
 いかにか親とは云ひながら 無心に来るいちらしさ
 不憫のものよと思はずも ホロリと落す一雫」
 三「ア、左様かよしく、遣しませう、ア、時や手函をもつて參れ
 ナニ愚圖々々云ひなさるな、黙つてもつて來なさい」と云はれて母
 親も餘りのとに呆れ乍ら手函を持つて來ると三十郎は中から二百兩
 の金子の包みを取り出し 三「貞やこれは二百兩ある、これをお前に遣
 すから日外其方に申した通り…… 真「ハイ 三「モ一宜しからう
 真「畏まりました、左様なれば父上様、母上様御免遊ばして下さい

まし』とお貞は金子を持つて歸つて行く娘の後姿を見送つて袖を顔に當た母親が『母』モシ貴方、マアアノ貞の姿を御覽遊ばせ、召仕の者にも面目ないではございせんか、どうぞお願ひでございませうから離縁さしてやつて下さい 三馬鹿な事をいはつしやい、貞女兩夫へ見ぬす、嫁しては夫に従ふが女の道、當人が覺悟して居るものを親の方からとや角申してはならん、まア〜モ一少しまて、私にも考へがあるから』と三十郎殿は流石眼のある人だけに落着いて居ります、お貞は立歸つて参りまして 貞旦那様、唯今戻りました 直オ、貞か、御苦勞だつた、いかに親子とは云乍ら餘り毎度の事ゆる三十郎殿さぞ御立腹であつたらう 貞イエ別段立腹もいたしません

直『そうかななく情深い方だな 貞失禮乍ら直人殿には貸にくいがお前に遣すと申して二百兩の金子を下さいました 直成程モ一身共には金は貸せぬと仰しやるも御尤も、お前に二百兩の金子を渡すといふのは實に痛入つた次第だ、では氣の毒ながら借りてゆくぞ 貞このお金は故なく御渡し申す譯には参りません 直フム何ういふ譯だ 貞甚だ失禮でございませうが貴郎は御指南番の御子息でございませうから劍術はお上手でございませう 直フム妙な事を申すな、私は劍術は上手といふ程ではないが、木劍竹刀の持方は存じて居る 貞妾も眞砂三十郎の娘、未熟ながら薙刀の一手位は心得て居ります、就ましては只今妾と一手試合を願ひまして、貴方が首尾よくお

勝勝ちになりましたら、此この二百兩りやうの金子かねを差上さしあませう 直ま「コレ〜つま
 らん事ことをいふな、女房かひを對手あひてに立合たちあつた所ところが仕様しやうがないではないか
 第一だい近所ちかぢよへ對たいしても体裁ていざいが悪い、私わしだつて下手へたには違ちがひないが豈まさか
 お前まへに負まけるやうな事こともないから、そんな下くだらない事ことをいはないで
 その金かねをお呉くれ 直ま「不可いけません勝敗しょうばいは時ときの運うんでございませう、是非ぜひと
 もお立合たちあひを願ねがつて、モシ妾めかけが負まけましたら速すみかに差上さしあげます、それ
 でなければ不可いけません 直ま「どうしても不可いけないか 直ま「何どうしても不
 可いけません 直ま「爾ごとうか、それほごまでに申まをすならいかにも立合たちあひをいた
 さう、其方そなたも武士ぶしの娘むすめ、自分じぶんの夫をとこの腕前うでまへが分わからぬのは殘念ざんねんであるか
 ら一度見いちどみたいと思おもつて左様さやうに申まをすのであらう、その代かり遠慮えんりよはいた

さぬぞ、其方そなたを打仆うちたふして二百兩りやうの金子かねを持もつて行くから左様さやう心得こころえろ
 直ま「宜よろしうございませう」とお貞まに於おては
 フシ「後うしろ鉢巻はちまき玉禪たまぜん 小褌こぶまをたかく取上とりあげて 稽古けいこ薙なぎ
 刀なた小脇こわきに抱込かみ 其儘そのま庭にはへ立出たちいでる」
 直ま「仲々なか支度しどが大仰おほだな」と直人なほとも同おなじく禪鉢ぜんはち巻木劍まきけんとつて立出たちいで
 直ま「サア參まるぞ 直ま「お對手あひていたします、御免遊ごめんあそばせ」と後あとへ下さがつた、
 お貞まは薙刀なぎなたを取とつて水車すゐしやの如ごとく打振うちふるる有様美事ありさまの腕前うでまへでございませう
 直人なほとも指南番しなんばんの悴せがれだけに木劍ぼくけんを中段ちゆうだんに構かまへてヤツ〜と聲こゑをかける
 近所ちかぢよの者ものは驚おどろいた、何事なにことが始はまつたかと塀へいの上うへへ上のぼつて見みると、庭にほ
 の真中まんなかで直人なほとが一生懸命しやうけんめい妻君つまぎみを對手あひてに立合たちあつて居ゐる一同呆どうあきれ返かへつて

「イヤどうも夫婦の立合とは珍らしいな、イヨーお楽しみツ」と聲をかける。直「黙れ、そんなに冷評すな、これも錢儲けだ……」成程錢儲けに違ひない、暫く位取りをして居る中、大喝一聲直人から打込んで来る木劍

「心得たりと受け流す 静流の瀧流し 巖に當る 水より早く 横に拂つた一文字 直人の諸足打拂へば 何かは以て堪る可き 其ま、後へ打仆れ 起上らんとする處を 起しもたてず飛掛り 石突返して 帯に突込み そのま、宙に引立てたり」

イヤ直人は驚いて 直「コレ貞、何を……」 直「恐れながら獅子の洞入り洞返しは是でございませす、よく覺えておいで遊ばせ」といひながら一つ廻してボンと撥ねたから、直人はグルリと一度廻つてバツタリ落こつた 直「ア、痛い、酷いことをするな、なんぼ私より上手だからといつても少しは加減をするものだ、酷い目に遇したな、金を呉れぬか 真「不可ませんお敗けになれば差上ぬといふお約束でございませす 直「現在の亭主を酷い目に遭して其上金を呉れぬとは餘り酷いではないか 真「酷くつてもいけません、お金の事よりも早速申上げなければならん事がございませす、貴方は劍道指南役、井伊直江様の御子息、八百石の大祿を頂く御身分でありながら、

の御亂行、家財を悉く費消し、武士の表藝といふ劍術は少しもお
勵みなさらぬ、婦人の妾にすら打敗ける様な未熟のお腕前では
フシ「若しも一朝事あるとき、御馬前の役に相立ず
さすれば君へ不忠となり 親へ不孝も此上なし。今
日よりお心改めて 武藝を勵み井伊の家 再興なさ
るお心なきか 女の身にてあるまじき 腕立なすも
眞實は 武術修業の其事を お勧め申さん下心せ
めては妻の心を汲み 御聞分こそあらまほしと 言
葉をつくし諫め立つ 眼には涙の玉となる 心の中

ぞいさぎよき」

直人は何ともいはず差俯向て聞て居りましたが 真「イヤ只今までの
亂行は我生涯の過失、其方の意見を聞て無明の夢が覺めた、何とも
面目次第がない、此上は速に行を改め江戸表へ參つて武藝修業
を致し再び井伊の家名を興し君公へ忠を盡す心得、明日ともいはず
今日只今出立をいたす 真「ア、能うこそ妾の申す言葉を御用ひ遊ば
し御改心下さいました、それではこの二百兩の金子は改めて路用に
差上ます、これで三年なり五年なり御修業遊ばして下さいまし」と
夫へ金子を差出す、直人は男の眼にも涙を流し 真「ア、さだ其方の
志し何とも禮の申様がない何れ成業の 曉再び遇はうと決心いた

した井伊直人早速旅の支度をいたし、其日の中に家内の者に別を告げて仙臺を出立いたし江戸表へ乗込んで、先づ修業する所は木挽町柳生飛驒守宗冬殿、日本一の先生と聞いて居りますから、これへ尋ねて参り、事の仔細を打明けて頼むと、柳生殿は御自分も一旦親御に勘當されたほどの苦勞人だから早速御承知になり、其儘御自分の道場に止めて置く、サア直人は一生懸命、寒暑の厭ひなく稽古を勵む、柳生殿も末頼母しく力を入れて教へる、斯して満四ヶ年経ちますと、直人も今は餘程の腕前になりました、ソコデ飛驒守殿もモ一國許へ歸つても宜からうと仰せられたから直人は大に喜び、飛驒守殿にお暇を申上げて江戸を出立いたし、仙臺へ立歸つて参りました

「世の中は三日見ぬ間の櫻かな 四年の間に御城下のかはる様子を見るにつけ 屋敷はいかになりしかと いそいで歸る我家の門」
 みると自分の屋敷は立派な道場になつて居る 直ハテナ誰か指南番が入つて居ると見える、何といふ名前か、ナニ井伊直人……是りや不思議だな、ウム分つたお貞も四年間便りをしないから相當の腕前の者を亭主にもつたかもしれぬ』と考へながら直頼む ○『ドウレ何方から』と門人も立派なものが出て來た 直「某は井伊直人だ、貞に只今歸宅いたしたと申して呉れ ○『へエ井伊直人様は江戸表へ御出になつて御不在でございます 直「分らん奴だ直人は我だ、一体稽古

して居るのは誰だ。○『御新造様で……直』ナニ貞が指南して居るのか。○『ハイ今に旦那様がお歸りになると稽古して下さるから夫まで妾が教へると仰しやつてお居で、ございます。直』別に亭主はないか。○『そんなものはありやア致しませぬ。直』そうか然らば主人直人が立歸つたといつて呉れ。○『へエそれぢや貴方が旦那様で……直』左様で。○『道理で亭主の有無を聞いて少く焼けますな。直』黙れッ……』早速門人が取次ぐとやがてお貞は夫へ立出で。直』これは能うこそお歸り遊ばしました、しかしながらお腕前を拜見いたしませぬ内は打解けて御挨拶もいたし兼ます、甚だ失禮ではございますが庭前へお廻り下さいませう。直』ナニ庭前へ廻れと申すは立合をするを

いふのか。直』左様でございます。直』ウムヨシ承知いたしました此方も腕前を見せたいと思つて歸宅いたしましたのだ、案内いたせ直』ハイどうぞ此方へ』と其儘庭前へ案内いたす四年居ぬ間に家の中は綺麗になつて道具もスツカリ整ひ、又庭先なども掃除が行届き植木も新らしく植てあります、お貞は手早く支度いたし一反り反つたる稽古薙刀を小脇に抱込み庭先へ立出で『失禮ではございますが、お腕前を拜見いたしますまでは夫婦の御挨拶は出来兼ますサアお對手をいたしませう。直』ム、此方とても腕前を見せたいと存じて立歸つたのだ、サア貞參れッ』と柳生流の正眼に構へてピタリと付ける、お貞は薙刀を静流の瀧流に取つて暫くの間ヤツと氣合をかけて居りましたが

颯とお貞が振込んで来た薙刀、

セメ「心得たりと受け流し 二三度四五度打合しが

急つて打込む直人の木剣 かはして拂ふ薙刀は 流

る、水よりいと早く 直人は兩足打拂はれ バツタ

り前へ仆れる處を 起しもたてず石突を 袴越へ突

入れて 其儘宙に引立たり」

イヤ直人は驚いて 直「コリヤ大變だ 真「お忘れ遊ばしたか、これは

獅子の洞入り洞返りでございませと」云ふより早く一つ廻してポン

と捻ねると直人は一つクルリと筋斗うつてバツタリ落ちる 奥「失禮

ながら斯るお腕前では貞の夫とは申されません、いま暫く御修業遊

ばせ」と門人に薙刀を渡してバラくと次の間へ飛込んだお貞が

フシ「思はず袖を噛しめて 四年振にて御目に掛り

飛立ばかりの思を堪へ 夫を情なく待遇つて 一夜

もお止め申さぬとは 道にはづれし事ながら、これ

も御身の爲なれば 何卒お容赦下されと 聲を忍び

て泣伏しぬ」

起上つた直人 直「ム、貞面目ない四年間の修業して参りながら、未

だ其方に及ばぬやうでは井伊家再興は思もよらぬ、今暫時修業して

來るから不在を頼むぞ』と塵打拂つて出んとする、袂を捉へた下男の庄助「旦那様、御新造様が情なく仰しやるのも皆貴方様を立派なお腕前にして上たいばかり、お心の中の苦しきは御察し申すも御氣の毒なわけ、必らずお心を易へす今一修業遊ばして下さいまし直ム、其方にまで心配をかけ何とも申譯がない、今度は必らず立派な腕前になつて參るから安心いたして呉れと

フシ「妻々として 出てゆく直人の腕よりも 妻のお

貞の心中こそ哀れなり」

直人は其儘江戸表へ引返し、柳生飛驒守殿に有し次第を申上ると宗冬殿も驚かれ「飛」ア、左様か其方の妻は天晴な腕前ぢやな、飛驒も

一度立合つて見たいものぢや、然らば尙々勵んで修業いたせ』といふ仰せ、これより更めて三年の間修業いたしましたがもう此頃では柳生の道場でも對手になるものがない位、美事な腕前に相成りましたから宗冬殿御賞美になつて更めて柳生流極意皆傳を許して「飛」サア直人、其方は最早當道場に於て並ぶ者なき腕前に相成つたから、今度歸國いたしても妻に敗を取る氣遣はないとおもふ、就ては早々歸國いたして妻と立合つた上家再興の心がけを致すがよいぞ』と仰せられる、直人は有難くお禮申上げ、此度は何でも妻を打据ゑて耻辱を雪ぎ家再興いたさんければならんと勇み進んで、更めてお暇申上げ、他の門人達にも別れを告げて江戸表を出立いたし日數重ねて仙

臺城下武者小路なる我屋敷へと立歸る、

フシ「例も立派になつて居る 我家の門塀に来て見れ

ば 相も變らず稽古の氣合 木劍竹刀打合ふ音」

直「頼まう ○『ドレー』バラく」と出て來た取次、ヒヨイと見ると先

年參りました當家の主人 直「イヤコレハ獅子の洞入り洞返りの先生

でございますか…… 直「黙れ、真に直人が只今立戻つたと左様申

せ ○『ハイ暫くお扣へを願ひます』と、奥へ來つて其由をお貞殿に申

入れるお貞は丁度稽古を了つて自分の部屋へ戻つたばかり夫直人殿

立歸りしと聞て大に喜ばれ 真「それは、能うこそお歸り遊ばした

只今お出迎ひ致すから其由申上げてお呉れ ○『へい此度も庭前へお

通し申しませうか 真「コレハしたり左様な事を申すものではない、

サア門人衆一同お出迎へ申上げるやうに……』とあつてお貞は手早

く衣類を更め門人を連れて玄關先へ立出で兩手を突て『コレハ能う

こそお歸り遊ばしました、御挨拶は又改めていたします、まづ奥へ

……』といはれた井伊直人、心中にオヤ／＼今日は庭前へ廻さない

な、シテ見ると乃公の腕前が分るか知ら、こうなると直人も妙なも

ので威張りたくなつて來る 直「コ、ハ、其方は直人の腕前の分らぬ

中は夫婦の名乗りをいたさぬと申したではないか速に庭へ廻り今一

度其方の薙刀に掛つて見たい 真「コレハしたり、最早妾如き者は到

底お對手は叶ひません、まづ奥へお出で遊ばせ 直「ム、不思議だな

立合はいたさぬか、それでは三年の苦心も甲斐がないではないか是非とも對手をいたせ 真何と仰せられましてもお對手いたすことは出来ません、どうぞ此方へ……』といふので仕方がないから直人も奥へ通る、こゝで貞が更めて歸宅の喜を述べ門人共も代るく挨拶をいたします、早速真砂三十郎殿方へこれを報せたから、三十郎老人、取るものも取敢ず、急いで参り、久々に婿舅面會いたす直人は謹んで頭を下げ 真私一旦の心得違ひより、數々御心配を相掛け重々恐れ入ります、只今斯様の姿となつて歸宅いたすも皆舅御はじめ、貞の心盡しによる處御恩は生々世々忘却は仕りませぬ

三「イヤ恩などいはれると却つて恐縮いたす、失禮ながら柳生流

は極意皆傳を受けられたか 真御意にございます 三「イヤ最早それにて拙者の望みも叶ふ次第、譯をお話し申さねばならが、實は私が若年の頃先君の御供して文祿元年朝鮮征伐の時、彼國へ押渡り大明の兵と激戦に及びし際、大勢の敵兵に取捲かれ、己に討死と見えた處へ、御身の父御井伊直江殿驅付け、忽ちの中に大明の同勢を追散らし、危き一命お救ひ下された、御恩の程は夢の間も忘れ申さぬ其後直江殿逝去いたさるゝ際、忝直人の儀を幾重にも頼むと某を枕邊へ招いで遺言いたされた、何卒して直人殿を天晴の武者にして御恩報じをしたいと、存じ娘貞を嫁に致す中、其許の放蕩元々愚かな人でないと看破つた三十郎

フシ「娘の貞に云ひ含め 聊か武藝を知るを幸ひ斯の
 通りに計らひしが 思ひ届いて今の有様 左程の腕
 前となられしは 此上もなき我喜び これぞ即ち直
 江殿へ 御恩報じの萬分の一と 語るを聽いて驚く
 直人 さては父上生前に 造り残せし功績の今ぞ我
 身に報い來て 斯る事とはなりしかと 思はず知ら
 ず手を合せ 嬉し涙に暮れ居たり」
 さて眞砂三十郎殿より此事を伊達忠宗公へ言上に及ぶと、殿も大層
 お喜びになり、速かに直人は八百石にて劔道指南番仰付られ、尙又

貞女にも、天晴なる女丈夫稀なる處の貞女であると御賞美の上、薙
 刀御指南役に仰付られ化粧料として二百石を賜はりました、いくら
 白粉を厚く塗つてもこれぢやア塗切れぬ其時分仙臺中で白粉の相
 場が狂つたといふ。

フシ「誰いふとなく仙臺の 鬼夫婦よと謠はれし 井
 伊直人正興と 妻の貞女の物語り これにて結局置
 きまする」

井伊直人終

柳生飛驒守

浪花節俱樂部口演

フシ「瀧川の巖に隔るゝ水さへも 後の例はあるも
 のを 憂年月の流れとて 末には遂に廻り合ふ 盡
 きぬ縁の其名さへ 柳生の糸の末長く 譽れをあぐ
 る二階笠」

御好みに應じ二階笠の試合と題して柳生飛驒守宗冬殿の傳記を言上
 いたします、此方は柳生但馬守殿の三男で幼名を又十郎と申しまし



た、ところが斯る名人の家に生れながら、兄と違つて劍道が嫌ひ、唯だ風流に心を寄せ、優に柔しき人でございます、父兄は幾ら勧めましても根が嫌ひであるから擊劍の方へは心を寄せられません、其のうち追々成長するに従つて益々氣儘が増長いたしましたして、父も持余す位でございませぬ、所が但馬守殿の愛妾にお玉といふものがある、是は芝濱松町の搗米屋三右衛門といふもの、娘で、但馬守殿も奥方の亡くなつたから屋敷へ引取て寵愛して居ります、然るにこの又十郎殿、若氣の至りとは云ひながら、お玉も今を盛りの妙齡、フシ「ふれなば落ちん花の色 深き情に馴れそめて いつしかとけし下紐の 井手の契りも淺からぬ 交

情となりしぞはかなけれ」
 或夜但馬守殿お玉の部屋へお出になると内部で密々話聲が聞へるから、何者かと思召して障子の隙間から御覧になると、悴又十郎がお玉と差向ひで酒汲交して睦ましく話して居ります、これを見て但馬守殿烈火の如く憤り其儘御自分の居間へお歸りになつて直ぐに大道寺平馬を呼び、但「コレ平馬、只今玉の部屋に畜生が二疋密會をして居る、直様二疋共門前拂を申付けよ、其方密かに隠まひ等いたしては相成らんぞ、少しも猶豫はならぬぞ」と甚だお顔の色が變つて居りますから、ハツと驚いたる大道寺平馬はさては若様に相違ないと思ひまして直にお玉の部屋へ遣つて参りました、見ると此の光

景でございますから、平馬は顔を曇めまして 平「若様、何といふ態で只今此所へ對して御父上がお出でなされましたでございませう
又「ウム、来た〜来たが親父は怖い顔をして去つて了つたよ、何か言つて居るか 平「言つて居らつしやる所ぢやアございませぬ、非常の御立腹でございます 又「少しも親父は怒る所は無いちやアないか、親父は宜い年をして此のやうな婦人を寵愛するといふのは心得が違つて居る、乃公と玉とは丁度年頃も似合ひだ、それで親父は何んと言つて居る 平「左様でございます、貴下方御兩所を今晚のうちに追出して了へと仰つしやいました 又「何だと、是れは面白い、親父が追出すといふなら乃公の方から出て行つて遣らう、此様な劍術

家の道場に居るのは大嫌ひだ、サアお玉支度をしろ、是から二人で仲睦く暮らそう、今から出て行くから平馬決して止めるな』暫し呆れて居りました大道寺平馬は 平「マア若様お待遊ばせ、何所へ行くにした所が金が無くては何うする事も出来ませんから』と言つて大道寺は納戸の方へ参りまして百兩といふ金を持つて参りまして 平「それでは若様、之れを大事にお使ひ遊ばせ、又御不自由の時には私方まで御手紙を下さいますし、其内には折りを見て御父上様へお詫をいたしますから 又「イヤ種々世話になりました、サア参らう』とそこで又十郎殿は眞夜中の頃ほひお忍び姿でお玉を伴れて木挽町のお屋敷をお出ましになりましたが、別段何所へ行くと云ふ的もなく殊

に深夜のことですから大きに困つて又『何うしたもんだお玉、何所ぞ行く所は無いか 玉』左様でございます若様、最う斯うなれば致方がございませぬ、濱松町の父の宅へ何うぞお出で遊ばせ』と玆で携米屋三右衛門の所へ參つて厄介になつて居ります、又十郎は百兩の金子を親父に遣はしたから、三右衛門は大きに喜んで、二階へ上げて大切にする、其後半年ばかり爲す事もなく暮して居りましたが、或日のこと淺草の觀音へ參詣して歸つて見ると、二階の物干でお玉が下帯一ツで晝寢をして居る、女の寢姿の悪いのは見られたものでない又十郎は呆れ返つて、ア、どうも大變な女に關係したものだ、かゝる畜生同前の女に迷つたのは我が誤り、

フシ「我も將軍御指南番 柳生の家に生れながら 唯だ放蕩に月日を送り 父兄に御苦勞かけたるは 申譯けなき不孝の罪 是より心を改めて 武藝を勵み天晴の 腕前上達なしたる後 お詫をなして父上に御勘氣お許し願はんと 夢の醒たる又十郎 其まゝ、此家を立退いたり」

是から又十郎が諸國を修業したが、腕前が未熟であるから至る所で打込まれる、夫れも厭はず國々を巡つて居るうちに備中國飯山の山中に於て計らずも羽賀井平馬入道一心齋といふ眞影流の名人に面會

致し、此の人に就いて七ヶ年の間一心不亂に修業いたしました、何にしる柳生の血筋を受けた人であるから、上達は驚くばかり、師の一心齋も感歎する程の腕前になりましたから、「コレ又十郎最早夫丈の腕前になれば柳生殿も勘當を許されるに相違ない、只今より江戸表へ立歸るが宜からう」と仰せられましたから、又十郎大いに喜び厚く御禮を述べて御暇を戴き、即日飯山を立つて江戸表へ乗込んで参りました、

「色は眞黒眼は凹み 髪は亂れ鬚は伸び 海布の如き衣服を着て 大小打込む其姿 咄しに聞きし山男 妖怪變化と驚き 道行く人は逃廻る」

日數重ねて江戸表へ到着いたし直に自分の屋敷へ参らうと思ひました、たが考へて見ると、筒様な姿で屋敷へ参つても取合ふまい、此上は駿河臺の大久保御老人へ頼んでお詫をして戴く方が宜からうと思ひましたから、其まゝ錦小路のお屋敷をさして参りまして、玄關に懸つて案内を乞ふ、出て来たのは用人笹屋喜内、又十郎の姿を見て喜何んだ、其方は又「ヤア喜内、久しく逢はぬな變る事もないか、喜貴様は全体何者だ、化物見たやうな風をして……」又「ハ、ハ、ハ、斯機な姿をして居るから、見違へるも尤もだ、刀の拵へを見る、是ならば譯るだらう」と、

「差出す刀は稻穂柄 見覺へのある柳生の定紋」

喜内はビツクリ驚いて」

喜「ヤア貴方は柳生様の又如何にも又十郎で有るぞ、御老人は御
壯健か 喜「へエ、相變らず御達者でございます 又それは結構、實
は伯父上に御目通りを願ひ父に勘當の御詫をして貰はんと存じて參
つた、一寸此由取次いで呉れ 喜「へエ、只今晝寐をしてお出ですか
ら、お起し申しますまで暫らくお控へ願ひます」と又十郎を待たし
て置いて喜内は奥へ飛込み 喜「御前く」と揺り起す、彦左衛門目
を覺して 彦「ウム、ア、ア、コレ何んで起すのだ、今一番槍を入れ
やうと云ふ大切な所だ 喜「お寐惚げなすツちやア往けません、實は
甥御様が御見へになりました 彦「何に甥が來た、彦六か曲膳か 喜」

イエ彦六様や曲膳様ならお待たせ申して置きますが、貴方が御覽に
なつても分らない甥御様で 彦「馬鹿に爲るな、伯父の見て分らぬと
いふ甥が有るか 喜「マア何んでも宜うございますから出て御覽なさ
い」と障子を細目に開けて指差した、シツト眺めて彦左衛門 彦「何
んだあれは化物か 喜「ソーラ御覽遊ばせ、貴方にも分りますまい、
分らなければ刀の柄を御見なさい」と喜内自分が言はれた通りに真
似をする、

「シ」よくく眺めた大久保が 扱は柳生の悴かと
開くる障子の音さへも 絶えて久しき此場の對面
御なつかしやとばかりにて 袂に縋る又十郎 先立

つものは涙なり」

大久保老人も一度は驚き又喜び、手を取つて一間に伴ゆき、此處でいろ／＼話しを聞く又十郎も若氣の過失にて勘當を受けた事から今まで修業の次第、一伍一什の物語りをいたしたから、大久保老人も大いに感じ、彦、ム、豪い、そういふ腕前になつて参つたのなら己れが一つ仲裁をしてやらう、幸ひ其の姿で有るから汝を南部の恐山といふ山中から出た山男だと言つて柳生と一本立合せよう、其の次第は是れ／＼斯様々々……』と何か又十郎殿に言合め、其の大小刀を取り上げて了つて怪しげなる木剣を一本差させ、其身の供の内に之れを加へられまして、御自分は駕籠に乗つて木挽町なる柳生の屋敷へお出でになりました『御客大久保彦左衛門様』と觸れ込みますと且いふ剛へ山地いし石が山、早速奥へお通りになると、柳生但馬守は其所へお出になりました、但、オ、誰かと思へば御老体、何か御用有つて御出になりましたか、彦、但馬殿、乃公が今日來たのは他でもない柳生家一萬石の身代に關はる一大事が出來たから遣つて來たんだ、但、ハアそれは何様なことが出來ました、彦、實は此度南部の恐山といふ山中から山男が一疋出居つてな、それが今日天下の老中へ願書を差出したんだ……、但、御老体、落語なら又緩容聞きませう、彦、イヤところが今日は眞面目だて、其の山男の願書には非常なことが書いてあるから心配だ、當時將軍の指南番柳生但馬守と

敷へお出でになりました『御客大久保彦左衛門様』と觸れ込みますと且いふ剛へ山地いし石が山、早速奥へお通りになると、柳生但馬守は其所へお出になりました、但、オ、誰かと思へば御老体、何か御用有つて御出になりましたか、彦、但馬殿、乃公が今日來たのは他でもない柳生家一萬石の身代に關はる一大事が出來たから遣つて來たんだ、但、ハアそれは何様なことが出來ました、彦、實は此度南部の恐山といふ山中から山男が一疋出居つてな、それが今日天下の老中へ願書を差出したんだ……、但、御老体、落語なら又緩容聞きませう、彦、イヤところが今日は眞面目だて、其の山男の願書には非常なことが書いてあるから心配だ、當時將軍の指南番柳生但馬守と

云へる者は、最早年を老つて彼れは耄碌し腕前は衰へて居る、然るに其のやうな者に大祿一萬石と云ふ高祿をお遣しになるといふのは何うであらうか、憚りながら此の山男は、十分撃劍の心得がござるから、速かに柳生を御放逐の上は、私が成代つて將軍家へ御指南を申します、若し私の申す所を疑はしく思召せば、一應柳生但馬守と立合を仰付けられるよう、屹度彼れを撃ち据へて御覽に入れる、其上にて千石でも二千石でも宜しい、御召抱へ下し置かれたいと、斯ういふことが認めて有るんだ、で、老中部屋で色々評儀をいたし、寧ろ上様へ申上げて其の御裁可を仰かうかと言つて居つた所へ此方が參つて譯を聞いたんだが、お手前も知つての通り當時の上様は彼

アいふ活潑な御仁であるから、夫れへ申上げる時には、是りやア面白、一應余の目通りで立合をさせいなご、仰せられぬものでもない、然うなつた日にはお手前が首尾よく山男に勝てば宜しいが彼れも彼れだけの大言を拂ふ位であるから、豈失通常一般ではあるまい萬一にも其許が負けると云ふやうな事が有つては取返しが付かぬ、そこでマア上様へ申上げる事は待つて呉れと言つて、其の山男を伴れて乃公が此家へ來たんだから、一應道場へ通してお手前其の山男の腕前を試して御覽、先づ此の位な腕前なれば充分勝てると云ふ見込みが付いたら山男の望み通り將軍家のお目通りに於て立合をして充分撃ち据ゑて遣るが宜い、萬一到底勝てないと云ふ腕前の者なら

左様な奴を活して置いてはお手前の家の爲に宜くないから、今うち計略をもつて殺して了はんければならぬ、何方にするも一應其者の腕前を試して見るが宜い、但ムフー真個でござるか御老体、誰れが嘘を吐くものか、但怪しからぬ奴が出て参つたもので、定めて夫れは發狂人でございませう、何うか是れへお通し下さい、彦夫れでは庭前へ通すが宜からう』といふので、大道寺平馬を以て大久保の供方へ此由を申付けますると、豫て用人笹尾喜内が伴れて來て居りますから、早速お庭の切戸口より兩人這入りまして、山男は履脱石の上に手を支いて畏まつて居ります、すると障子をサツと開いて御兩所共縁側にお立出でになつて、但『コレ、山男、頭を上げエ』

又十郎セヨイと顔を上げて父但馬守様の顔を見上げると、フシ『七年ぶりの今日の對面、面變りせし父上の、髪の白きを見るにつけ、今まで他にさまよひて、御苦勞かけし不孝の罪、さだめし夫と知るならば、お吐り受ける事ならん、何んとお詫も詮方なく、思ふ心のとつおいつ、堪へ兼たる一粟』

但馬守殿も暫らくの間山男の様子を見て居りましたが、蟲が知らせる事か何か心に合點いてホツと吐息を吐き、但『大久保御老躰、世の中にこの但馬ほご子に縁の薄いものはござるまい、長男十兵衛は我に

優つた腕前であつたが一旦慢心を起せしため心狂ひ、柳生の跡目を譲ることも叶はず、

フシ「大和正木坂に隠居させ また二男刑部は十二才にて早世なし 三男又十郎は七年前 勘當せしまゝ、行方も知れず 三人の子までありながら 揃ひも揃ひ役に立ず せめて今日十兵衛なりと 手許に居れば某が 自身に立合ふまでもなく これなる男を打据ゑるべきか それさへ今は叶はぬ仕儀 世に子の無きは 辛いものぞと 涙ながらに物語る 父の言葉

は胸に針 さすより苦し又十郎 たゞ平伏して泣居たり」

彦左衛門も心中に、ア、尤もなりと思つたが、態と聲を高く彦左衛門「但馬、今日はお手前の愚痴を聞きに来たのではないぞ、柳生家に關はる一大事だから、乃公が伴れて来たのだ、早く立合ふ仕度をさつしやい、但馬「イヤ御親切千萬辱けない、然らば道場へ案内をいたさうと思ひ返して但馬守、先へ立つて彦左衛門と山男を伴ひ、道場へお這入になると、ピタリと入口の戸を閉めて仕舞つた、入口の所には大道寺平馬早乙女嘉兵衛の兩人が扣へて居ります、嘉兵衛の方は氣が付ないが、流石幼少から育て上げたものですから、大道寺

平馬は氣が付いたと見え、平「オイ嘉兵衛、今這入つた男を貴公何だと思ふ、嘉「何だといつて南部恐山から来た山男ぢやアないか、平「それは違ふ、彼れは又十郎様に相違ない、嘉「エ、ツ………彼んな穢ない姿をして居る又十郎様があるものか、平「イヤ、たとへ穢ない風をして居やうとも若殿様に違ひない、今椽側で大殿が愚痴を仰しやつた時、彼の山男はホロ／＼涙を翻して居た、大久保様は彼アいふ御仁だから、まア山男といつて道場へ通し、其上で勘當の御詫をしやうといふ思召しだらう、嘉「フーム、どうも拙者には山男が若殿様とは受取れない………」と兩人は頻りに話をして居りまする、道場の中では但馬守様、羽織を脱いで袴の股立を高く取上げ、傍らに立掛

ある秘藏の業物、加賀の清光の鍛上たる二間柄穂長の名槍を取つて、バツと鞘を拂ひ、流々と打揮つて道場の中央へ立出でた、之を見ると彦左衛門殿、大に驚き、彦「オイ／＼但馬、山男の腕前を試すのに真槍を持出してどうするつもりだ、但「イヤお捨置下さい、たとへ拙者年老たりといへども、將軍家の指南番、夫れを相手にして立合ふなど、申す不埒者、次第に依らば只一突きに突殺す所存でござる、山男には何なりとも當人の望みに任せ、お持たせ下さい………」サア大久保御老人困つて了つた、彦「サア大變だ、親父が真槍を持ったからといつて、まさか忤に真劍を持たせる譯にはいかず、どうしたもんだらう」と考へて居たが、仕方がないから、道場の隅所の方へ

又十郎殿を伴れて行き、彦何うする又十郎、親父が真槍を持つて次第に依ると突殺すといつて威張つて居るが、お手前は得物を何にする。又『左様でございませう、某は別に得物は入りません、幸ひ此所にある二階の塗笠を持つて對手をいたしませう。彦何だと、妙な物を好むな、夫れで大丈夫か。又『大丈夫でございませう、之れを親父の頭へ被覆て御覽に入れます。彦親父の頭へ被覆る、大變な忤もあつたものだ、宜いかな。又『御心配は御無用に願ひます……』是りやア。どうも大變な立合が始まると、老人非常に心配して居ります。彦『オイ但馬最ういよくお手前は毫碌したと見えるな、劍術遣ひは止してしまへ、この山男は塗笠をお手前の頭へ被覆ると申して居るぞ、

何のことはない、蟲齋同様の取扱ひだ。之れを聞くと但馬守殿烈火の如く憤り、大眼を見開いて又十郎をハツタと白睨み。但『甚だ以て不埒な事を申す奴だ、イデ一槍の許に突伏せて、其舌の根を引抜き呉れんと、

フシ腕に覚えの柳生宗則 槍流々と引抜き 中段にこそ付たりけり 又十郎は一世の浮沈 たゞこの立合と覺悟を定め 更に恐るゝ色もなく 板壁に懸けたる二階笠 右と左に取上げて 槍先にこそ立向ふかゝる中にも身を耻て 父に顔せ見られじと 左の

笠にて面を隠し 右なる笠を取延べて 正眼にこそ
構へたり 且に氣合を計りつゝ 矢聲を合せ立上る
但馬守の槍先は 流るゝ星よりいと早く 胸先近く
飛來る 身を開いたる又十郎 飛鳥の如く手許に付
入り 打込む笠は宛然に 笠にちなみの村雨が 花
を散らすに異ならず こそは不審しと槍を引き 再び
突くを搔潜り 丁と受けてはいや狂ふ 舞の手ぶり
のたはむれや 花にゆかりの花笠は 大巾利巾の獅
子頭 獅子團亂旋の舞樂の砌り 親子連立つ唐獅子

の 牡丹に狂ふ如くなり 暫しの間兩人は 息も吐
かせず立合しが 流石名譽の但馬守も 侮り難き對
手の腕前 何れへ突込む隙もなく 油斷のならぬ大
敵かなと 呆れ果たる計りなり 呼吸を測り又十郎
右の手に持つ塗笠を 但馬守の面上望みバツと計り
に投付けたり 飛鳥の如く飛來る笠 心得たりと身
を開く 隙を窺ひ飛掛り 手に持つ槍の千段卷 攫
んで手許へ引たれば何かは以て堪るべき 思はず膝

を突く所を起しもたてず左の手に持つたる笠を取、直し但馬守の頭に被覆せ其まゝ後へ退きつゝ、兩手を仕いて扣へたり」

大久保老人はいとも烈しき立合に手に汗を握つて見て居りましたが、始めてホツと安心いたす、但馬守殿は槍は取られ笠をかぶせられ、酷い目にお遇ひなすつたが、漸々笠を取除けて起上り、ハツと息を吐いて、鳥御老体、成程拙者も老態いたした、是まで天下に恐るべきものはないと心得て居つたが、この山男の腕前は恐るべきものにして、凡人ならざるやうに思はれる、到底拙者如きもの、遠く及ぶ所でござらぬ、斯る腕前の者が世に出しならば、將軍家の指南番は

此者に仰付らるゝやう御推舉を願ふ、某は今まで高祿を頂戴いたし居りし申譯の爲め此の場に於て切腹いたす、序乍ら御見分下さるやうと、すでに小刀の柄に手を掛んといたしたから、馬、年甲斐もない命遣ひの荒い男だ、どうだ此山男の腕前は確かなものであらう、お手前は速に隠居してこの山男に家督を継がせるがよい、今は何を隠さう七年前に勘當した其許の忤、又十郎がこれだけの腕前になつて歸つて來たのだ、よく側へ寄つて顔をみさつしやい……」

聞いて驚く但馬守、又十郎は頭を低げ又「お父上、其砌りは若氣の過失にて御勘氣受け、家を離れてさまよひ歩き、御老年の父上に親しく孝養もいたさぬのみか、反つて種々御苦勞をかけ、

何とも申譯の言葉もござりませぬ、幸ひ大久保御老体の御情により心にもなき立合して失禮をいたせしも、今かくお目通りをいたすは望外の喜び、何卒前非お容赦の上、御勘氣御免のほど偏に願上げまする」と涙ながらに頼み入る、

フシ「姿容はかはれども かはらぬものは我子の音聲
最前よりして心の中 もしやそれかと悟りつゝ 色
にも出さぬ胸の中 苦しさ堪へ居たりしが 其一言
を聞くよりも 今は人目もあらばこそ さては我子
かなつかしと 互に手に手鳥さへも 焼野の雉子夜

の鶴 情にかはりなきものをいかに之まで包みしぞ
と 嬉し涙に暮れ渡る 心の闇ぞ哀れなり」
大久保老人も共々嬉し涙にくれ、さて改めて一間の中にて親子の對面、大久保よりいろく話をしたから、但馬守の喜びは格別、早速勅書を容した上、跡目を譲ることに取決めました、さて大久保老人より追々三代將軍へ右の次第を申上げ、殊に劍道は羽賀井一心齋取立の名人、父に優るとも劣らぬ天晴の者であるから但馬守にかはつて御指南番仰付られ度旨お願申上げたから、家光公早速お許しになり、改めて又十郎に柳生家相續の儀仰渡されました、但馬守殿は早速御隠居遊ばして又十郎に跡を譲られる、又十郎殿は飛驒守宗冬

と改名かひめいいたし、父ちちに代かはつて將軍御指南番しやうぐんごしなんばんをお勤つとめになり、お覺おぼえも目出度めでたくあまた數多おんじんの門人とりたを取立とて、武名ぶなを當代たうだいに輝かがしたといふ。

フシ「名なさへ柳生やまぶの糸いとながく 枝えだを連つらぬる父ちちと子こが 武名ぶなを後のちに傳つたへたる 忠ちゆうと孝かうとの二階にかい笠がさ 是これにて終をはりといたしまする」

柳生飛驒守 終

笹野權三郎

浪花節俱樂部口演

フシ「雨あめあられ雪ゆきや氷こほりと隔へたつれど 落おちれば同おなじ谷川たにかはの 水みづの流れながと人ひとの身みは 定さだめ難がたいと云いふけれど 怠おこたらず 往ゆけば千里せんりの道みちも猶なほほ 牛うしの歩あゆみで何なんのその 金剛石こんがうせきも磨みがかずば 玉たまの光ひかりは放はなつまじ まして況いはんや人ひとと生うまれた上うへからは 業わざを學まなんで美名びなをば 後のちの世よまでも殘のこさんと 誓ちかひを立たてし武藝ぶげいの龜鑑きかん

道は紀伊の國 名草の郡和歌山の城主 御三家の内
 紀伊大納言頼宣公の臣下にて 八百五十石を賜はり
 し 寶藏院流槍術指南役 笹野權太夫義友の一子
 槍の權三と尊を今の世までも殘されたる 忠孝美談
 の一節

紀伊國名草郡和歌山の城主大納言頼宣公、此の殿様は寛永の年間、
 槍紀州と云はれ、紀州公の前では槍の尊は各々恥て致しませんでし
 た、槍の名人は紀州にありと云はれ、頼宣公も槍術は頗る妙手に達
 して居りました、然るに三代の將軍家光公は至つて勇猛活達の君で

ございまして、三代公の世は武術を以て治めたと云ふ位、柳生但馬
 守、小野次郎右衛門、此の兩人より家光公は武藝を學びました、然
 るに家光公が柳生小野の兩人をお招きになり、當時槍を執て日本隨
 一と云ふは何者であるとお尋ねのあつた時、兩人は只今槍を執て日
 本で一と云はれる者は、豊前小倉小笠原の臣高田又兵衛、此者は南
 都寶藏院胤榮の門に學び、師の胤榮を凌ぎ、先づ此の高田義次が槍
 を手にしたならば、恐く此者の向ふへ廻る者は餘もござなくと申上
 げました、ソコで早速豊前小倉の小笠原家へお使を立まして、又兵
 衛を江戸表へ招き、吹上庭前で將軍家御覽の席で又兵衛が妙手を現
 はし、其時に家光公より槍を執ては日本隨一の名人と云ふ感狀を賜

はりました、此事が紀州様の御耳に這入りました、尾州殿が御國詰の時には紀州様が江戸詰、紀州様が國詰の時には尾州殿が江戸詰でございまして、恰度又兵衛が將軍家の御前で、槍術の妙手を御覽に入れた際は、尾州殿が江戸詰で、紀伊家は國詰であつた、水戸は副將軍と稱し參勤交代は致しません、將軍より又兵衛が日本一の賞状を賜はつたと云ふのを聞き、紀伊家は殊の外是をお心にかけて、又兵衛義次を當所へ招き、彼の日本一と云ふ技量を見たいと思召し、小笠原の屋敷へ使を立ました、小笠原公も大いにお喜びになり又兵衛に此趣を告げ、義次は早速に支度に及び、紀州和歌山へ乗り込んで、紀州家の家老安藤帶刀の許へ滞在を致しまして、三日間休息を

し第四日目になり、早々お目通り仰付られるとのお言葉故、安藤帶刀と又兵衛は同道をして庭前へ通りました、此時正面を見てあれば「紫縮緬に白く三ツ葉葵の定紋染抜たる幔幕を張廻し、金屏風を飾り立て、朱毛氈をば敷つめて、大納言頼宣卿は麻上下を御着用になりまして、金銀造りの小刀をば前半にと帯み、其御側には紀伊家名代の槍術者、正木角之進、石野傳一郎、種田五郎左衛門、長沼新五右衛門を始めとして、家中の重立つたる方々は、今日を晴と華美を飾つて控へたり」

高田義次は殿様に對つて黙禮を致し、江戸表で將軍家の前で相手に出る者がなかつた爲に、俵崩し其他模様だけをば御覽に入れ、義次は槍の名人は紀州にありと云はれる位、誰人が今日我相手に出るであらう、永年の間今日に至るまで槍術を學び、己れが腕の真相を現すは今日なりと差控へて居りました、此時第一番の相手に出たのは長瀬新五右衛門、此人は山田流の槍術の達人、又兵衛の向ふへ廻り孩兒に等しき又兵衛の爲に扱ひを受けて敗を取りました、續て石野傳一郎、此の人も敗を取り、第三番目に出たのが正木角之進、是が紀州家の槍術者で第一の達人、又兵衛の向ふへ廻り、又兵衛が正木の様子を見て、此の人を突伏する丈ケの腕はあるが、態々江戸表より

お招きに預り、出る者もく殘らず負しては紀州家に恥辱を與へる様なもの、夫が爲め勝べき腕前があるのを、又兵衛は遂に先方へ勝を譲ると云ふ譯には參りませんが、勝負なしと云ふので引分になりました、角之進は今日高田の爲に敗を取りし時は、最早奉公は今日限りとの決心でございましたが、高田の情を喜び花も實もある武士は義次なりと大いに喜び、又兵衛は頼宣卿より酒肴等を頂戴いたし上々の首尾で安藤帶刀の屋敷へ戻りました、帶刀は改めて酒肴の用意を致し、又兵衛を待遇し、槍術の古實を帶刀は義次に一々尋ねて居りました、酒宴半ばに至り義次は又「偕て御家老、此度は某未熟なる腕でありながら御當家のお招きによりて參り身にとりまして

此の上の喜びございませぬ、就きまして御家老へ伺ひますが、今日
 お上の御前に於て正木先生と試合を致して居る際、殿の御傍に紫
 縮緬の帛のかゝつた太刀を持って居りました、十五六に相成る美少年
 最初は殿の後に控へて居りましたが、終には殿より前へ膝を進め、
 頻りに手前の手元に目をつけて居りました、お小性はお名前は何ん
 と云はれるか 御存知でございませうか 帯「オー殿の御側に居た太
 刀持の小性、彼は笹野権三郎と申す者でござる 又「笹野権三、ハテ
 不思議な事があるものよ」と思ひ 又「アノ権三郎殿の父は何役を勤
 めてお在になりますか 帯「寶藏院流槍術指南笹野権太夫と申す者で
 又「笹野、當家御譜代でござるか 帯「イヤ新參お抱へになりました

又「年齢は何才位でございますか 帯「左様モ一是れ五十餘りにもな
 りませう 又「ハ、ア」と思つた義次は不思議なことがあればあるも
 のよ、
 フシ「吾未だ南都寶藏院覺善坊胤榮の許に居た時分
 同門の内で兄弟の約束をした 笹野権頭彼は元和元
 年五月の六日 大坂落城の折からに 右大臣秀頼公
 の御傍にあつて 太鼓の丸で討死を遂げたと云ふこ
 とは豫て聞き及びたるに 今當紀伊家に笹野権太夫
 殊によつたら權頭義友は 大坂城で討死爲したると

は偽りて 其場を逃れ當家へ住込んだるにはあらざるや、コハ一ツ權太夫と云ふ人に面會して 眞偽を確めんと思ひました故」

又「偕て御家老、其權太夫殿のお屋敷は何れでございます 帶「權太夫の屋敷は是より四丁程隔つて居る 又「誠に相濟ませんが一寸權太夫殿にお目にかゝりたい」安藤帶刀殿は 快く承諾をして、喜助と云ふ小者に云ひ付け、早々支度及び、喜助の案内で高田義次は高砂の角屋敷權太夫の許へ訪れ 又「お願ひ申すく」○「ドール」若黨の三平は夫へ出て参り 三「何れから」と竹んで居る人を見れば、身の丈拔群にして、朱鞘の兩刀を打込み供を連れて居りますから叮嚀

に 三「何れからお越で 又「拙者は豊前小倉小笠原の臣高田義次と申す者でござる」三平は高田義次と聞いて、偕は此の人が日本一の槍の名人だと、猶ほ一層叮嚀に頭を低げ 又「權太夫殿御在宿召さるか在宅とあればお目にかゝり度罷り出ました三「暫時お控へを」三平奥へ参り權太夫へ取次ました、叮嚀に御通し申せと、三平は再び玄關へ参り、高田義次を一と室へ案内を致し、茶煙草盆を出し、義次が待受けて居りました處へ、

フシ「襖をサツと開いて入つて参りましたのは 黒羽一二重の五所紋の附たお羽織 仙臺平のお袴で小刀を前半に帶し 年の頃ほひ五十二三にならうと云ふ

尤も立派な装ひをして 夫に兩手を支さ

權太「是はく先生には能うこそその御出でございます、始めてお目に
かゝりますが、笹野權太夫は手前でござる、此度は遠路の處態々の
御越千萬御苦勞にござる 又「吾は高田義次でござる」と權太夫の様
子を見れば、

「某は南都寶藏院の場で 兄弟の約束を爲した
る權頭義友と 今是へ出たる權太夫とは天地の相違
ハテ是は吾推量に違はず 兄弟の縁を結んだ權頭は
全く大坂城で討死を爲したるに違ひなし 今更人違

ひなれば何んと申さう様もなく 只茫然と手持無沙
汰に控へたり」

消あつて 又「太夫殿、今日吾等が罷出たのは別儀ではございま
せんが、實は御家老より承りし處、當家に寶藏院流槍術指南役笹
野權太夫殿と云ふ方が是れある趣、拙者の兄弟の縁を結んだ笹野權
頭は大坂で討死を遂げ、然るに流名も同じ寶藏院流、權頭と權太夫
の差違の爲に、若しや權頭が討死を爲したると云ふのは虚説であつ
て、名前を變へ當家へ住込だこと、愚察致し、お尋ね申した次第で
ござる、御子息權三郎殿は槍術は餘程の熱心の方と見える、只今御
子息はお宅でせうか」是を聞いて權太夫は 權太「偕は先生と權頭と同

門のみならず、兄弟の縁を御組になつた趣を始めて承る、實は權三郎と申す者は手前の實子ではございません、貴殿と兄弟の縁を組ました權頭義友殿の遺子でございます、手前は元和元年五月の六日、大坂城で討死を爲したる權頭の臣、前名中根權太夫と申す者、
 と共に討死を致さんと思ひし處、主人は汝は此處をば落ち延び是なる久若を連れて何れへなりとも立退き、笹野の家名を相續致して吳イとの御言葉
 フシ「夫が爲め惜からざる一命を永らへまして 久若殿をば脊になして 大坂城をば立出て 廻り廻つて 御當家へと参り 笹野の家名を相續爲し 笹野權太

夫と申しますが 全くは中根權太夫のなれのはて 今では大恩受けたる主人の若君をば 實子と稱して 今日迄 御育て申した甲斐もあり 貴下と兄弟の縁を結んだ事柄を 承りしは今が始めて 不思議な事があればあるものよと 暫時の間は高田の顔をば見 つめて居たり」
 又「權太夫殿、御子息は何れにお在か、少々御目にかゝりたイ權太、只今書見を致して居りますから、是へ招きませう 又「イヤお呼立申しては相濟まん、何れの部屋でござる 權太「イヤ然らば御案内を致

しませう 又「夫には及びません笹野氏、槍を一本拜借致す、御免」と長押にあつた六尺柄の槍を把より早く、鞘は彼方へバツと飛んだ

り、
フシ「權三郎の部屋を指して 拔足さし足忍び足 悟

られまじと義次は 槍を把て様子を窺つたり 跡へ

續いた權大夫 偕は高田義次は 我主君と兄弟の縁

組爲したりと云ふけれど 夫は偽りにて 何か是に

は御主君に 必ず共に深き怨みがある爲に 遺子の

若様へ槍をつけてぞ 怨みを晴さん夫が爲か 例へ

怨みがあるにもせよ 若しも若君様の身の上に係は
る災ひある時は ヤツカ其儘捨置へきぞと 權大夫
義遠も一刀の中柄へと手をかけて 同じく跡へと續
いたり」

エイ聲と共に、又兵衛の突出した槍先は、流星の如く、權三義種は

胸板より脊筋へかけて、只一と突に突貫いたと思ひきや、此時思は

す己れと權大夫は一刀の鞘を拂ひ、突出した槍を義次は手元へ繰引

いた際 權三「何人のごさる 又「失禮御免」と障子を開き、權三郎は
見れば、今日殿の御前で槍術の秘術を現はした高田義次なれば、兩

手を揆て頭を低げ 権三「是は、先生能くこそこの御出、今日は誠に御苦勞に存じます、手前の様な未熟者は、今日先生の御手の内をば拜見を致し、大いに修行の種に相成ります 又「権三郎殿、つかん事をお聞き申す様だが、吾等が最初突出した時に、御身は躰を少しも動かさず、槍を手元へ繰引いた時、扇を持つて身構へに及んだのは如何なる譯でござる 権三「是は先生のお言葉とも存じません、最初の槍は試しの槍と心得ました 又「オー如何なる譯で試しの槍と云ふ處へお氣が付いた 権三「左ればでござる、手前の居間は二間四方でございまして、先生の御出になつた廊下は三尺の幅、右が壁になつて居りまして、座敷の内二間柄の槍は眞の武士は用ゆべき筈は

ございませぬ、確に六尺柄の手槍と心得、若し手前を眞に突かうと云ふ氣なれば、モー三尺踏込まんければ手前の身躰には届きませぬ 又兵衛は是を聞いて大いに感心を爲し、
 「梅檀は芽葉の内より尙ほかんばし 蛇は寸にし
 て人を呑むの兆あり 恐るべきものは此の権三郎義
 種なり」
 又「是は、實以てお身のお言葉義次も大いに恥入りました、失禮ながらお年若だが能く其邊にお氣が付きました」権太夫もホツと安心をした 又「権太夫殿、良御子息を持れ義次嬉しく存する」と権太夫を見れば、刀の鞘を拂つたなりで拔身を提げて居ります 又「笹野

氏、如何なれば貴公は刀の鞘をお拂ひになりました、拙者を切るつもりでござるか 權太「誠に面目次第もござらん、實は是々手前の心の取り違ひより、斯様な事を致し申譯もござらん、先づく」と改めて權三郎と高田と權太夫三人一室へ集り、時に義次は權太夫に對ひ「又『如何でござらう御子息を拙者當所に滞在中心得て居る丈けのことは御子息へ御教へ申したい、此儀御承知を願ひたい 權太』願つてもないことで手前の方より望む處でござる故、何分御門弟の一分にお加へ願ひたい」と茲で日の暮るまで又兵衛と權太夫は盃の取り遣りを致し、安藤帶刀の許へ義次は戻りました、是より權三郎は義次に従て一心不亂に學びましたが、又兵衛義次は主持つ身の上であ

るから、永く當所にも滞在出來ず、殿様に御暇を願ひ莫大なる下され物を頂戴致し「ヨ〜紀州を立爲やうと云ふ時に臨み、權三郎を招きて 又『扱て權三、武藝は車を坂へ引揚る如く、油断をすれば忽ち跡戻りを致す故、吾等が江戸表へ參つた跡に精々修業を致せ』と云ひ含め義次は江戸表へと戻りました、
フシ「お話變つて權三郎義種は 高田先生の一言が心膽にと深く銘じました故 是からは一心不亂に相成り 寒の師走も暑の六月も 嚴冬肌をつんざく寒さも厭はずに 十年一日の如き思ひを爲して 修業致

して居りましたが、月日に關守なく、光陰は矢の如く
 義次先生が江戸表へ戻つてより、昨日今日と思ひし
 に、早や三年の後となり、時しも寛永十二年三月三
 日、上巳の節句の當日と相成りました」

紀州家では上巳の節句の當日に、毎年家中の重立ちたる者を虎伏山
 竹垣の城内に集め、當日は殿様より御一統へ手づからお盃をお遣
 はしになり、殿様御奥へ成らせられた跡は不禮講、身分の階級を論
 せず、飲めヨ唄へと云ふ大騒ぎ、當日權太夫は感冒の心地で宅に居
 り、權三郎は父に代つて登城を致しました、スルと同藩で五百石を

賜はつて居ります、種田五郎左衛門長利、此人は種田流の槍術の先
 生でございませうが、お酒を飲まないといふ誠の良い人ですが、酒を飲む
 と謂ゆる酒亂と云ふ、言葉が暴くなり、随分喧嘩口論を致しました
 今日も十二分に酩酊を致しました、五エーイ、各々今日は誠に目出
 度の、就ては各々方は太平が斯く打續いて居るとは云ひながら、武
 士たるべき者が横手を叩ち、或は飛んだり剣たり致して居られるが
 遊ぶ時は大いに遊び、勤むべき時には猶ほ勤めんければ叶ん、治に
 居て亂を忘れず、太平が餘り續くと弱に流れて叶ん、武士を千日養
 つて置くのは、只一時の役に立んが爲、スハ鎌倉と云ふことを常に
 各々方は心得て居らんければ叶ん』他の人々は是を聞いて、「オイ

く始まつたせ、つまらん理屈を云ひ始めた』と宜い工合にあしら
 つて居りました、五郎左衛門はフト後を見ると、笹野權三郎兩手を
 膝へ撲て、形を崩さずに控へて居ります 五『權三殿、失禮ながら貴
 公は高田氏より見抜れた位の人物故、定めし槍術の古實は詳しく御
 存知でござらう、槍は短い槍が利益でござるか、長い槍が利益でこ
 ざるか 權三『左様、未だ修業中の手前、何れが利益かと云ふことは
 存じません 五『何に修業中であるから何れが利益があるか知らんと
 は、人を馬鹿にした一言、餘人なれば兎もあれ、貴公は腹からの槍
 術者ではござらんか、知らんでは濟ません』權三郎も弱つて 權三『
 アー困つたことが出来た』と思ひ 五『サア笹野氏、長いのか短いの

か 權三『左様でございます、手前丈ケの考へは短いのが利益と心得
 ます 五『短いのが利益、吾等は長いのが利益と思ふ、短い槍はイ
 ザと云ふ時に役に立たん 權三『如何なれば役に立ちません 五『云ふ
 ナ、論は無益、長いのに利益のある處を見せてやらう、夫れ槍を持
 つて来い』と門弟に云ひ付ける傍に控へて居た人々は、頻りに種田
 を諫めましたが、中々肯入れません、槍を取り寄せ五郎左衛門は庭
 前へ飛下り、權三郎も退くに引かれざる場合、同じく禪十字に綾な
 し、サア来い来いと流儀の槍を取り、五郎左衛門の向ふに廻り、難
 なく長利を突伏せました、途端に警蹕の聲と共に座が改まり、權三
 郎が元の席上へ直り、大納言頼宣御立出になり、改ためて權三郎

をば側近く招き、頼「如何に權三、若年ながら只今の腕前賞置くぞヨ」と殿よりお盃を賜はり、八ツも過ぎてしまひ、七ツ六ツ五ツ時頃まで殿の御相手を致し、やうくの事でお暇を賜はりました、
 フシ「權三郎義種は玄關へと出て参り、供待所の處へと来て見れば、供の金助は最前よりも待草臥て居りました故、ソコく支度に及び、大手を出て高砂の角座敷を指して戻らんと、絹川土手へとさしかかり、微酔機嫌の千鳥足、一步は高く、一步は低く、踏跟足を踏しめながら、土手の中央へかゝつた折柄、笹野

權三觀念しろと、黒装立の十四五人、義種の周圍をグル／＼と取り巻いたり、サア來イ來れと義種は父の譲りの志津三郎兼光の大刀を引抜き、權三義種、絹川土手にて、一世の大勇を振ふ御話は、後編を以て辨じまする」

笹野權三郎終

寶藏院覺禪坊

浪花節俱樂部口演

フシ「世の中は 有無の二つと悟りては 迷ひもいつ
 か猿澤や 水にうつれる三日月の 影もさしそふ鎌
 形に 心實修業の便を開き 幽顯二法の理を極め
 ほまれを上る槍の一筋」

エー今回御好に依りまして口演いたしまするは、寶藏院覺禪坊胤榮
 のお話で、之れは名代の鎌寶藏院流の槍の元祖でございます、此人



は上州箕輪の住人上泉伊勢守秀綱に従つて槍劔二道を學び、柳生塚原杯といふ人と共に上泉門下の鬼神と言はれた位でありまして、劍術の方も名譽であるが、分て槍術の方は天下の達人知らぬ者はない位、尤も人と云ふものは若い時は何んな方でも慢心と云ひまして、己れがと云ふ心がありますもので、此の覺禪坊が、槍を取つて天下廣しといへとも我右に出づる者はない、天上天下唯我獨尊日本一ではない世界一の名人だらうと大分高慢の鼻が高くなりまして、尤も諸國より名を聞傳へ態々奈良まで参りまして、槍術を稽古する人が澤山ございますから、道場に於ては門人が入替り立代り絶間がございませぬ、そこで槍の木の厚板へ自身に筆を取つて『寶

藏院流槍術指南天上天下唯我獨尊覺禪坊胤榮』と認めまして表へ掲げ、全世界唯一の槍の名人は乃公だと、いつて居ると、或日の事玄關へ。○『頼む……』門『ドレー』と門人一人立出で見ますると身の丈群に勝れ色の眞黒な眼は眞鍮色に光つて髪の毛は赤く縮れ、恰で銅の針を植たる如く筋骨逞ましき人物、大小横たへ草鞋穿き、旅武士の躰に見えまする。門『何れからお出になりました。』胤榮は在宅か。門『ハイ、師匠は居りますが……』。○『然らば斯様取次げ、天上天下唯我獨尊杯と云ふ傍若無人の看板を出すとは沙汰の限りの馬鹿坊主、一本手合せを致さんと存じて出て参つた、早々出で、對手をいたせと申せ。門『ハア、少々御控なすつて……』。大變何うも熱の

強い侍が来た、家の先生が天狗だと思つたら又上手を越えた天狗様
 が御出でなすつた……先生 嵐「何んだ 門」恐ろしい怖い面をした
 侍が参りました、傍若無人の看板を出して不届千萬、一本手合せ
 をするから、嵐榮に罷り出て對手をしると何うも頭から喰ひ附きさ
 うな権幕でございませうがございませう』嵐榮カラ〜と打笑つて
 嵐「世の中には馬鹿者が絶えんな、我か腕前を知らず、己れの未熟
 を顧みず、此方と立合を望むなど、は嗚呼がましい奴、宜しく早
 く道場へ通せ其奴の荒膽を挫ひて追歸して呉れる』家の先生も中々
 熱が強いから、是は面白い立合が始まるだらう』と門人又出て参り
 まして 門「どうぞ此方へお通り遊ばせ ○『通れと申さんでも、罷り

通る』と荒々しく道場へ通り、八方へ眼を配つて居る所へ、嵐榮立
 出でました 嵐「お尋ねに預つた覺禪坊は拙僧だ、槍術立合に参られ
 たる由、如何にも望みに任せ御對手をいたす、併し最初門人を一兩
 輩差出すに依つて、夫とお手合せいたされて後、我等御對手いたす
 ○「イヤ〜弟子共を對手にいたす考へでは参らん其方と立合ふ心
 底で参つた、早々支度に及んで出でろ 嵐「イヤ當道場 掟として、
 是非一兩輩門人と立合はざれば、最初より我れは對手をいたさん
 ○「掟とあれば是非に及ばん、一人は面倒だ、二人でも三人でも、
 對手する者は固まつて出て参れ、何人でも是れへ出ろ』と大變な勢
 ひだから、驚いた門人、然らば望みに任せ、足腰の立たない様、突

伏せて打据ゑて呉れやうと、代稽古をいたす門人の中でも、頗る腕
 前の者が兩人夫へ立出でまして、△「イザ拙者共御對手いたす。○」ア
 、宜しく、サア來さつしやい」と擔ひで参りましたる手槍をリウ
 く引扱いて、道場の真中へ突立つた、覺禪坊の門人兩名左右に
 別れ、茲に槍を合せる事二三合にして、彼の男は苦もなく兩名の槍
 を巻上げてしまひまして、手元へ飛び込み、右と左へ同時に突倒し
 槍取直して。○「サア坊主速かにはへ出るツ、覺禪坊早々是へ參れ」
 其腕前に流石の胤榮も少しく驚いたが、胤「宜し、望みに任せ對手い
 たす」と夫れへ立出でましたが、まだ其の時分には素槍でございま
 す。○「サア然らば覺禪坊立合つて此方が打勝つと表に有る看板を持

つて行くから左様心得ろ。胤「宜しい、貴公の御名前は。○」名前など
 を云つて聞せるには及ばん、打負けたら名前を申聞ける、打勝てば
 看板を打つて往く。胤「強慢なる其の一言、何程の事あるべきか、サ
 ア來い」と
 フシ「胤榮槍を取直し。位取りなす其中に。大喝一聲
 彼の武士が。突懸け來つた槍先きを。心得たりと力
 ツキと受止め。上段下段と五六合。暫しの間打合し
 が。忽ち手許へ飛込んで。胤榮の持たる槍を刎ね上
 げ。アツと云ふ間に一突つけば。胤榮ガツクリ後ろ

へ倒れ 其儘氣絶なしたる様子」

件の男はサツサと槍を引擔いて表へ飛出して仕舞う、門人共は驚いて、直ぐに駈寄つて見ると覺禪坊胤榮泡を吹いて其處へ引繰り返つて居りまする。門「サア大變だ、今の奴は何んだらう、恐ろしいどうも早技だ、ヤアエイと云ふと先生打倒れて終つた、早く水を持つてお出で、水を早く持つて来なくては往かん、何か薬があるだらう、早く薬を持つて来さつしやい、活を入れんければ往かん、ヤードツコイシヨ」と一人抱起すと。○「オイ〜」△「なんだ。○「活といふ事はまだ拙者真正に知らんが、此ういふ時だ、一ツ拙者に入れさして貰ひたいものだ、覺えて置かんと不都合だ。△「そんな事を云つて居

る場合でない。○「イヤ御願ひだに由つて、ごうか拙者に入れさして貰ひたい、確か此邊だと思ふ」と肩から脊筋の兩脇を撫下して来てエイツと活を入れたが、中々氣が附かない。×「そんな事では往かん拙者が入れるから退かつしやい、ヤツエイ」とやつたがまだ氣が附かない。×「これはごうも酷くやられて終つた、活は跡廻しにして艾を持つて来い艾を。△「何處へ灸るんだ。×「土不踏へ灸へたら宜からう」夫からコテ〜艾を持つて来て、覺禪坊の土不踏へ遠慮もなく灸た奴が一時に燃へ出したから堪らない、目を廻して居た覺禪坊、ウーンといつて刎ね起きた。胤「コン〜、オー熱い、何をいたす。×「先生お氣が附きましたか、確かり遊ばせ。胤「ア、熱い」邊りを

キヨロく見廻し。嵐「今の男は何うした。×尊師が倒れる途端に表へ飛出しました。嵐「ウム、残念千萬、今日はチト気分が悪かつた爲めに意外の不覺を取つたが、モウ何處かへ逃げて歸つたか。△「逃げには参りません、威張つて歸りました。嵐「何にしる残念千萬、何所の奴だ、ごうも足の裏が甚く痛い、ごうしたのだ。×「實は活を入れましたが、お氣が付きませんから、土不踏へ変をドツサリするました。嵐「とんでもない事をさつしやる、ア、ごうも足の裏が痛んでならん、何んだか知らんが彼奴は、ツイゾ見た事も聞いた事もない奴だが、何所から参つたかな。△「エ、先生へ申上げます。嵐「何んだ。△「アノ表に出して置いた看板が失なつて終ひました。嵐「ごういた

した。△「最前の奴が持つて行つたんでございませう。嵐「ウム悪い戯らをし居る奴、ごうも致し方がない、併し看板がなくては往かん、早々看板を造らへろ」と又檜の木の厚板へ

フシ「寶藏院流槍術指南 天上天下唯我獨尊 覺禪坊

胤榮と立派やかに認めまして」

五六日經て之れを又表へ掛けた、スルと又。○「頼む。門「ドレ」と出て見ますると例の侍。○「傍若無人の看板を表へ掛け、沙汰の限りの馬鹿坊主、今一度立合に参つた、早々對手をいたすやう。門「少々お控へなすつて……先生。嵐「何んだ。門「此の點の侍が参りました、馬鹿坊主に罷り出で、對手をいたせ、馬鹿坊主出るく。嵐「コ